

若澤寺を探るⅤ

若澤寺跡 2

～若澤寺跡調査報告書～



長野県波田町教育委員会

若澤寺跡 2

～若澤寺跡調査報告書～



目次

はじめに	3
若澤寺総合調査の経過	教育委員会 … 4
発掘調査からわかったこと	原 明芳 … 8
若澤寺出土遺物について	市川 隆之 … 30
西光寺跡について	原 明芳 … 38
若澤寺参道調査について	教育委員会 … 44
町内古文書調査でわかった	
若澤寺に関する新事実	百瀬 光信 … 48
若澤寺廃仏毀釈とその後	田中 昭三 … 54
野麦街道沿いの調査	大月 康雄 … 58
波多山城跡について	市川 隆之 … 66
若澤寺跡の保護活動	教育委員会 … 74
元寺場遺跡と若澤寺	牛山 佳幸 … 76
若澤寺の総合調査を終えて	原 明芳 … 86

はじめに

若澤寺総合調査は、第1次では元寺場跡を、第2次では若澤寺跡を発掘調査しました。しかし、若澤寺跡からの出土品は江戸時代後期のものがほとんどで、15世紀半ばに現在の場所に移ったとする寺伝との違いに疑問が残り、平成17・18年度の第3次調査となりました。

17年度は金堂跡を、18年度は中堂救世殿跡、方丈・護摩堂跡に、計6箇所のトレンチを入れました。いずれも夏の真っ盛りの中での発掘作業でしたが、不思議なことに太陽が出ているにもかかわらず、木漏れ日と気持ちのよい風で暑さはまったく感じず、むしろ涼しいくらいでした。水沢沿いのこの高さに寺院があった一因かなと思ったりもしました。期待と不安の中、丁寧に土を掘り除いていくうち、石の塊が出始めたり、陶器の破片が見つかったりすると、期待が一気に膨らんで発掘の醍醐味が感じられました。また、なかなか何も出ない時には、指導の先生の「発掘は出ないのが当たり前」の言葉に励まされての作業でした。

今回出土した遺物は、今までのものとは年代が明らかに違い、戦国時代や江戸時代前期のものが大部分で、第2次調査より一歩前進したことになりました。

平成11年度から始めた若澤寺総合調査は、今回をもって一区切りとなります。調査の結果、県内の寺院跡でこれだけ調査されたのは若澤寺だけであり、以前から言われている「信濃日光」などの伝承が、発掘結果と結びついた唯一の寺であります。今後も遺跡を守っていき、町内外から広く認められた文化財にしていきたいと考えます。

8年間にも及ぶ長い総合調査に、若澤寺に対する深い愛情と熱意を持ってご尽力いただいたすべての関係者の皆様に対し、深く感謝するとともに改めて御礼申し上げます。

平成19年3月

波田町教育長 木下 保雄

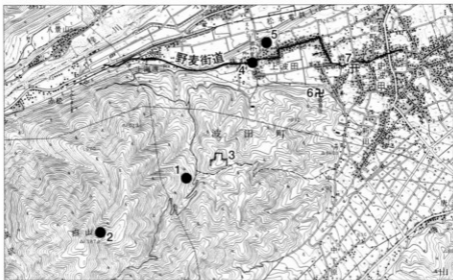


若澤寺総合調査の経過

波田町教育委員会

若澤寺の概要

若澤寺跡は、白山（1386m）の山麓から流れる水沢に沿った標高約940mの谷あい位置する。若澤寺はもともとこの場所で活動していたのではなく、2キロほど上がった白山山頂から少し下がった場所を中心に、修験の場として活動拠点があったとされる。この地が元寺場跡である。



第1図 若澤寺跡とその周辺 (1:35,000)

- 1 若澤寺跡 2 元寺場 3 波多山城跡 4 仁王門 5 西光寺跡
6 盛泉寺 7 諏訪神社

中世・室町時代に、現在の場所に移動したと考えられているが、その時期、経過等については解明されていない。

若澤寺は、山号を慈眼山もしくは水沢山といい、伝承では奈良時代の天平勝宝年間（749～756）に行基菩薩により創建され、田村將軍（坂上田村麻呂）によって再興されたといわれている。

中世には地元の豪族からの庇護を受け、戦国時代には武田勝頼や小笠原貞慶から寺領の寄進を受けていた。江戸時代には京都智積院の末寺となり、松本藩から手厚く保護され、波田だけでなく松本平一円からの寄進を受け、「信濃日光」とも称えられた。



絵図 「若澤寺一山之略絵図」

かの十返舎一九を始めとして、全国から多数の参拝客が訪れたようだ。隆盛を極めたと思われる江戸時代後期の様子は、「善光寺道名所図会」や「若澤寺一山之略絵図」より窺い知ることができる。

しかし、明治3年(1870)に行われた廃仏毀釈により、若澤寺は取り壊され、仏像等の什物は町内外へ散逸してしまった。いくつかの建物は移されたものの、現在は石垣と平場、礎石が残るのみとなった。

調査の目的

町の指定文化財の多くが若澤寺に関係したものであり、地域のシンボルとして栄華を極めた若澤寺。町の文化財を語る上で、若澤寺はもっとも重要な遺物であることは間違いない。しかし謎は多く、忽然と消えてしまった感は否めない。寺跡の遺構を中心とした調査を行うとともに、関係文書類、伝承、伝説を含めた総合的な学術調査を行うことにより、将来にわたっての保存・保護・活用を図るべく若澤寺総合調査は始まった。第3次となる今回は総合調査の一区切りであることを念頭に、これまでの調査を踏まえ、同様に遺構を中心とした調査を実施した。

調査経過

▼調査前（～平成11年以前）

平成8年、標高1300mに位置する元寺場跡から2つの遺物が発見される。古瀬戸四耳壺、古瀬戸瓶子（ともに町指定有形文化財）である。「遺跡内の倒れた木の根っこに、寄り添うように並んでいた」状態で発見されたそうで、何か（落雷であるとか）の拍子に木が倒れ、偶然にも壺が姿を現したのだろうか。状態も良く、山歩きをしていてこれを見つけた者は、さぞその生々しい鮮やかさに奇異な印象を受けたと思われる。遺物の発見により、元寺場跡調査の機運が高まった。

この出来事と並行するように、平成11年までの数年間、元寺場跡の地権者である国の森林管理署より、再三に渡る遺跡の扱いについて打診があった。町の大切な遺跡として保護整備・活用をするような予定はないか？というものであった。活用するもしないも、幻とまで言われているこの遺跡が、果たしてどのような価値があるのか？ まずは基礎的な調査を行い、把握をするべきではあろうという流れとなった。更に関連する町で最も重要な史跡である若澤寺跡についても、しっかりとした学術調査を行ったことがなく、県や町の関係者からもその調査に対する機運が高まっていた。そういった状況から、町では初めてとなる本格的な学術調査「若澤寺総合調査」がスタートすることとなった。

平成12年からは国・県の補助を受けることになるのだが、この段階でも元寺場跡への評価認識は不安定で、補助金までもらって出土物が無ければ、また遺跡としての成果が得られなければ、という不安を抱えてのスタートであった。

▼第1次若澤寺総合調査（平成11年～13年）

若澤寺の前身といわれている元寺場跡の調査を行った。この場所には堂跡と思われる礎石や、建物が建てられていたと思われる平場が残っていることが確認され、平成12年に行われた現地発掘調査では、予想を上回る出土遺物も発見された。これにより寺院の存在が明白になり、大きな成果を得る結果となった。（詳細は既刊「若澤寺を探るⅠ『元寺場跡』」を参照）

▼第2次総合調査（平成14年～16年）

前年までの元寺場跡調査を受けて、調査箇所を若澤寺跡に下ることになった。礎石の発見や当時寺で使用していた大量の遺物など、大きな成果を上げるに至った。反面、活動年代等が確認できない課題も残った。（詳細は既刊

「若澤寺を探るⅡ『若澤寺跡』」を参照)

更にこの結果を踏まえて、今回の第3次調査(平成17・18年)に入った。

調査関係者

- 調査指導者 牛山佳幸(信州大学教授)
 宮島佳敬(長野県文化財保護協会理事)
 中川治雄(松本市文化財審議会委員)
 後藤芳孝(松本市寿小学校校長)
 市川隆之(長野県埋蔵文化財センター調査研究員)
 原 明芳(松本市岡田小学校教諭)

- 調査協力者 百瀬 光信、波多腰忠行、大月 康雄、元木 陽子、
 小林紀美子(以上 町文化財保護委員)
 古畑 繁實、百瀬くに江、藤沢 道子、柳沢 泰夫、
 中嶋平次郎、中嶋 禮子、山口 琴三、田中 昭三、
 蒲生 鏡、山下 京子、水沢山共有林組合の皆様、
 (株)写真測図研究所(委託業者)

- 教育委員会事務局

教育長	関 義弘(平成17年8月まで)
教育長	木下 保雄(平成17年9月から)
教育課長	竹村 洋子
中央公民館長	原田 英男
主 任	山本 政己(平成17年9月まで)
主 任	百瀬 耕司

今回の調査で、若澤寺総合調査はいったん終了となります。この8年間、関係者の方々には多大なるご協力をいただきました。皆様の情熱なくしては本調査は語れません。心より感謝申し上げます。

その他、関係いただいた皆様にも、心より感謝申し上げます。



発掘調査からわかったこと

原 明芳

概 要

元寺場跡を含めて、平成15年度までの調査の報告書が刊行されているが、今まで文献資料だけではわからなかった、若澤寺に関しての多くの情報を得ることができた。しかし、元寺場に平安時代に法灯が灯ってから現在までの1100年ほどの間に、白山頂上から上波田の現在仁王門がある場所までの宗教空間のなかに、鎌倉時代から室町時代前半、戦国時代末から江戸中期の空白の時期が存在する。平成17・18年の2年にわたる調査は、その間に若澤寺がどこに存在したのか、それとも無かったのか確認することを目的とした。

そのために、二つの調査を実施した。

一つ目は、現在の若澤寺跡の中に現在の地表に残る遺構の下にあったと考えての発掘調査の実施である。調査期間等の限定から範囲は非常に限定されたものになったが、これから述べるような大きな成果をあげることができた。なお、平成17年度は金堂面^{*}、平成18年度は中堂救世堂面と護摩堂・方丈面を対象とした。

二つ目は、山中に「ごんどうくぼ（金堂窟）」「つきがねあらし（梵鐘嵐）」「ふどうくぼ（不動窟）」という寺院に関係した地名が存在することが『波田町誌』などで指摘されており、現在残る若澤寺跡には無く他の場所に存在したという前提に立って、周辺地域の分布調査と地形観察を中心に行った。特に「窟」という呼称から、小規模な窟地を中心に踏査を実施したが、いずれもはっきり人工の地形と判断することはできず、寺院跡と想定できそうな場所を探し出すことはできなかった。ただ、近接する波多山城跡と関連した平場や空堀などの遺構を見つけることができた。そこで山城も、若澤寺とともに存在した時代があると当然考えられることから、関連を調べる意味で山城の踏査を行い、精度の高い縄張り図を作成した。その成果については、別項を立ててある。



第2図 若澤寺跡全体図



若澤寺一山之略絵図

なおこのほかに、若澤寺を総合的に明らかにしようという目的で、次の調査を実施した。

まず、参道の調査である。廃仏毀釈前は現在の若澤寺へ向かう林道と違い、参道は水沢に沿っていたとされ、発見された「若澤寺参道の図」をもとに踏査を実施した。もう一つは、その参道の起点となった仁王門が当初あったとされる、西光寺跡の踏査である。明治時代の地籍図と「西光寺絵図」をもとに実施した。これらについても別項を起こしてある。

※若澤寺跡はいくつかの造成面で構成されており、それぞれの面の呼称については、分かり易いように「若澤寺一山之略絵図」に描かれた代表的な建物名、「金堂面」「田村堂面」「中堂救世堂面」「護摩堂・方丈面」と呼ぶことにする。

(1) 平成17年度

① 金堂面

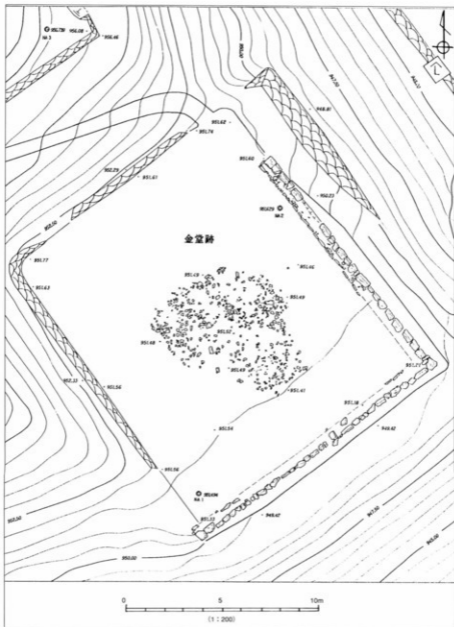
絵図には、この面に北東向きの正面三間×二間の四方に狭い縁をもつ小振りの建物が描かれているのみで、他の建物やほかの面にある塀などはみられない。描かれたと考えられる建物は、廃仏毀釈後に松本市今井の正覚院に移され、一部改修されているが現存している。遺跡の現状は、地表に草が生い茂っているが平坦で、基壇などの盛り上がりや礎石等の建物の痕跡は確認できない。廃仏毀釈で建物撤去後にこの面が利用されたという伝承等はなく、大きく改変されたとは考えられない。そのことは、絵図に描かれた金堂も、中堂救世殿や護摩堂のように基壇が描かれていないことから、規模のしっかりした基礎部分を持っていなかったことが窺える。



「若澤寺一山之略絵図」に描かれた金堂



松本市今井正覚院にある元金堂



第3図 金堂面全体図

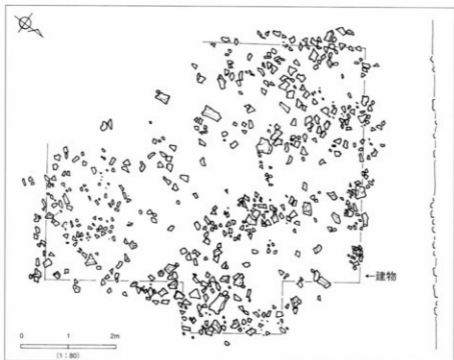


金堂面の集石（北西より）

今回の調査は、金堂面にどのような遺構が残っているのか、またこの面がどのように造成されたかを確認することを目的に実施した。

最初に、南北方向に幅2 m、延長8 mのトレンチを設定し、掘り下げをするために生い茂った草を刈り取った。すでにその段階で、拳大から人頭大の石が一面に検出された。そのため下部に掘り進めて遺構や造成方法の確認をするのをあきらめ、急拠その範囲を確認することにし、金堂面全体に渡って草を除去して、清掃をすることにした。しかし、樹木等の存在と調査期間が限られていることから、金堂面すべてを調査範囲へ拡大することはできなかった。

検出された石群は、北東7 m、南西6 mのやや不整形な北東方向に長い方形に、疎疎ではあるが平坦に敷かれている。しかしその内部には、はっきりとした建物の基礎を支えるような礎石に用いる大きな平坦な石等は検出されなかった。これらの石群の中には、比較的大きな石が北東方向に列状に配されているように見える。これは建物の柱を支える基礎部分の可能性が強い。それを見る限り建物の基礎部分は、当初予想されたように絵図に描かれてい



第4図 金堂面の集石図

るような大した基礎構造をもたなかった可能性がある。ただこれらの中でも比較的大きな平坦な石がまとまって敷かれた部分がある。絵図にある建物には屋根が張り出した参拝部分をもつが、その場所にあたるのかもしれない。今回発見した基礎部分に、建物位置を想定すると第4図のようになる。なお、このような遺構の残存状況から、この面は建物が撤去された後は、言い伝え通り中堂救世殿のように大きく改変されなかった可能性が強い。

しかし、敷石の発見によりその下部を確認できなかったため、この面がどのように造られたかは確認できなかった。

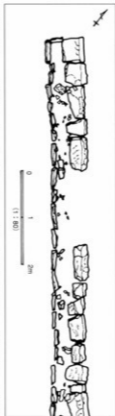
金堂面の石垣は、一段下の中堂救世殿、一段上の田村堂が置かれた面と比較すると、使われている石の大きさが最も揃っており、最も積み方が丁寧である。そのため、中堂救世堂面などと比較すると崩落や孕みが見られず、残存状況が最も良い。いずれも自然石をほとんど加工しないで積み上げた、いわゆる野面積みであるが、このような石垣の違いは、同じ石垣をもつ中堂救

世殿や田村堂面とは造成される時期が違っていたことを示していると考えられる。当然石垣を持たない護摩堂面も造成時期が異なっていた可能性が高い。現在残るこの伽藍は、標高920mから950mの30mの間に当初から計画され一度に造成されたとも考えられたが、そうではなく時間をかけて形成されたと考えることができよう。

また、この面の石垣には特徴が見られる。裏側を地表から見ると、板状の大きな石が立てて埋め込まれ、幅80cmほどの雨落ち溝状に見える。しかし雨落ち溝としては、調査で確認できた建物の位置と大きく離れておりその可能性は少ない。また、塀などの独立した構造物の基礎ではなさそうである。板状に並べられた平石との間には栗石は詰まっていないが、石垣の構造と関連がある可能性が高い。今のところ他の面の石垣はこのような構造にはなっていない。このことも、石垣を造る際の丁寧さと関係があるのかもしれない。

なお、この面の縁の部分も精査したが、礎石等を検出することはできなかった。絵図にも塀のような施設は見られない。

遺物は少量の陶磁器と寛永通宝が出土しているのみである。陶磁器の時期は18世紀末から19世紀前半と比較的新しい。そのほかこの面から瓦が出土している。周辺を調べると、背後の於鳥羽滝に流



第5図 全堂面の石垣

れる沢に向かう斜面に、多量の瓦が層をなして捨てられていることが確認された。建物を移す際にこの場所にまとめて捨てられた可能性が強い。

② その他の調査

絵図には、中堂救世殿と護摩堂面の間に於鳥羽滝へ向かう道から登る石段が描かれているが、前回の調査の際には確認できなかった。そこで金堂の調査に合わせて、その位置の確認をするために草木の除去を行い、検土杖で確認を行った。しかし道沿いには絵図にあるような2から3段の簡単な石積みのみがみられたが、石段はおろか、石段の痕跡すら確認することはできなかった。本来、石段がなかったことも考えられる。

(2) 平成18年度の発掘調査

① 中堂救世殿面

「水沢観音霊場」の碑や石灯籠（大正3年銘）が残されているように、水沢信仰の再興をめざした大正年間に動きがあった。大きな建物こそ造られなかったらしいが、碑が建てられ相撲の土俵も造られ、にぎやかに祭礼などが行われたようである。遺物も近代の陶器やガラスなどが多く出土し、そのことを裏付けている。その際に、中堂救世殿の礎石も取り除かれ、平坦にされたり大きな改変が行われたと考えられる。平成16年度の調査を開始する際に観察や測量をしたが、この面にあった中堂救世殿の痕跡を地表で認めるのは不可能であった。

平成16年度の調査では、建物が存在したと思われる場所にL字状にトレン



中堂救世殿面調査状況

子を設定し掘り下げを行った。それにより次の新知見及び課題が得られた。

- ①基壇の一部（周囲の土留めのためか）と思われる集石群を確認する。全体の形状も、検土杖で確認すると長方形の可能性が高く、軸方向も塀と違うので、「若澤寺一山之略絵図」の建物より古い可能性がある。ただし时期的には、遺物より18世紀末から19世紀と思われ、それほど古くはない。
- ②下面に1層あるいは2層の平坦面が埋没していることを確認した。ただし調査面積が狭くその広がり等は不明であり、遺物の出土がないため時期は不明である。
- ③この場所は本来谷地形であり、そこを大きく埋め立ててこの地形を造っていることを確認する。南西隅に絵図に「アカノ井」もあり、水が出るのも納得できた。

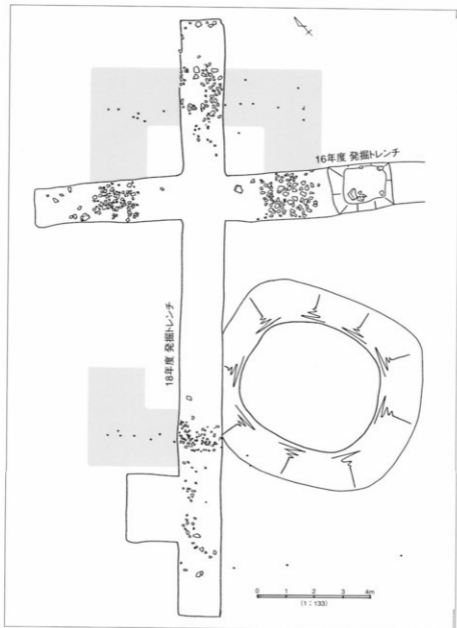
また、拝殿跡の礎石が残っていることを確認する。

そこで今年度は、絵図の建物に先行すると思われる建物の遺構の残存状況と規模と構造の確認、さらに下面の層の時代を確認する目的で発掘調査を実施した。

最初に、前回のトレンチが埋め戻されずシートをかけて保存してあったため、それを撤去し清掃を実施し、前回調査で発見された基壇に伴うと思われる集石群の位置を再確認する。次にそれに直行する形で、幅1.8m、延長20m程のトレンチを設定し表土を除去して掘り下げを行う。調査を始めてすぐに、地表下10～20cmで表土を除去すると、予想通りトレンチと直行する帯状の集石群を発見することができた。北部分のそれは拳大より比較的大きな石を用いて、密度濃く盛り上がるように敷かれており、その幅は1.8mほどで、その形状も前回調査部分と規模は共通している。それに対して、南部分の集石群



中堂救世殿面の集石群



第6図 中堂救世殿面の平面図 (1:133)



中堂救世殿面全景（金堂から）

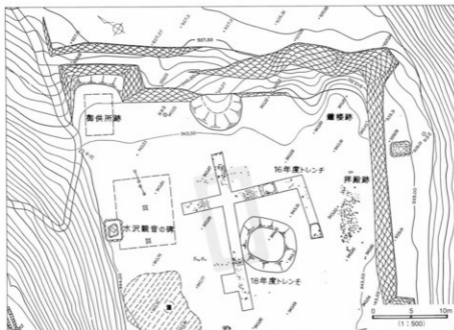


中堂救世殿面全景（東より）

は拳大より小さな石を用いており、他の部分と比較すると密度が疎らで規模も小さく見えるが、隣接して存在する大正年間の水沢観音の祭礼の「土俵」を造る際に大きな石は除去されてしまった可能性がある。石が敷かれた幅は1 m程度とやはり他と比べて狭い。いずれの石も周辺から産出する山石で、特別に運んできたものではない。それらを結ぶと長方形になると思われ、その規模は、集石の端から端までを測ると、南北の長い方向は13m程度、短い東西方向は5 m程度になる。集石群に囲まれた部分はやや高くなっており、褐色土（地山に近い粘土質の強い）が堅く叩き締められており、集石の役割は土留めの意味をもっていた可能性が高い。この帯状の長方形の集石群に囲まれた部分は、建物の基壇と思われる。ただし内部にいくつか石がみられるが、礎石と思われるものはなく、後世に建物を造る際に壊され除去された可能性が高い。「若澤寺一山之略絵図」に描かれた中堂救世殿は5間×5間のほぼ正方形で、その下の基壇も正方形に描かれており、それと明らかに形態も違う。また基壇と考えられる軸方向が、絵図では中堂救世殿の建物と石垣やそれに沿う塀と揃っているのに対し、今回確認された長方形の基壇は軸方向を揃えていない。このことは長方形の基壇に伴う建物は、石垣や塀が整備される以前のものである可能性もある。しかし遺物を見る限り、時間的にこの建物は18世紀末以降であり、絵図の建物とはそれほど時期は変わらない。どのような建物であったか想定することはできないが、基壇の形状の違いから向きは同じと思われるものの、絵図の建物とはだいぶおもむきも違っていた



絵図 若澤寺一山之略絵図にみられる中堂救世殿



第7図 中堂救世殿面の全体図（1：500）

であろう。また、もう一つ言えることは「若澤寺一山之略絵図」の建物の痕跡は、大正年間と思われるが、根こそぎ破壊してしまった可能性が強い。なお、金堂面と違ってこの面からの瓦の出土はなく、瓦葺きの可能性は少ない。記録にある銅板葺きであったことに間違いのないのかもしれない。遺物は19世紀代の陶磁器や寛永通宝などの中堂救世殿の時代のものや、大正年間の水沢観音の再興時に関連したものがほとんどである。

また当初目標とした下部の面の時期確認には、発見された遺構を壊すおそれがあったため、トレンチを下部に掘り進めることができなかった。そのため時代は確認できなかった。

②護摩堂・方丈面

これまでに行った調査によって、この面が若澤寺跡の中で最も良好に、廃仏毀釈段階に存在した建物の礎石が残されていることがわかった。特に南東部分には、かなり規模の大きな建物の礎石が発見されている。そこからは、塀なども含めて「若澤寺一山之略絵図」に描かれた護摩堂や玄関を復元する

ことが可能であり、若澤寺跡を今後保存・公開していく上で重要な遺構になると考えられた。それに対して北西部分は、絵図では雲を描いて隠してしまっておりはっきりしない。発見された方丈と思われる建物も、礎石は護摩堂よりも小さく不揃いで、配置も一定しない部分もあり、はっきりした建物を復元できていない。屋根も、護摩堂部分は瓦の出土もなく記録にある銅板葺きの可能性が高く、方丈部分は瓦が多量に出土することから瓦葺きであった可能性が高い。遺物はこの面と南斜面から18世紀末から19世紀の陶磁器類が多数出土しており、そこからは「信濃日光」とも呼ばれ、多くの参拝客が訪れていたことが窺える。

今回の調査は、この面の下部がどのようになっているか、具体的には18世紀末以前にこの場所がどのように利用され、最終的にどのように造成されているかを確認する目的で行った。地形をみると南側の斜面が大きく削られていることがわかり、その土を盛ることによって平坦面を造りだしているように見える。その想定が正しければ、かなりの大規模工事であったことになる。ただ当初の予想では、この面の一段下の面（平場C）のトレンチ調査や、そこに向かって傾斜する部分の清掃調査を行っても、18世紀末から19世紀の遺物しか見つかっておらず、この面の造成がほぼその時期と考えられた。その際に、他の時期の遺物の出土がないことは、この面がそれほど古い時代から利用されていないと予想された。

調査に際して、まず今までに発見された礎石をはじめとした遺構をそのまま保存する意味で、トレンチは礎石がはっきり残る部分避开ることとした。実際には、礎石の密度が濃い中堂救世殿よりの部分を避けて、南側の平場Cよりのこの面の緑の部分に、二本のトレンチ（南、北A）を設定して掘り下



調査状況



第8図 護摩堂・方丈面全体図 (1:575)

げを開始した。しかし途中、後で述べるように焼土層や遺物が発見されたため、急遽北側に二本のトレンチ（北B・C）を設定し掘り下げを行った。トレンチは幅2m、延長3m規模で、いずれもこの面の南に直行するように設定した。なお、北Cトレンチは他の3本のトレンチと異なる成果が得られたので最初に説明をする。

○北Cトレンチ

北A・B・南トレンチと調査を進めたところ、下部に後述する厚く焼土を多量に含む造成した層を検出した。その堆積状況の西への広がりを確認するため、護摩堂の玄関跡の礎石を避けて、北西よりに幅1.2m、延長6mほどの規模で設定した。

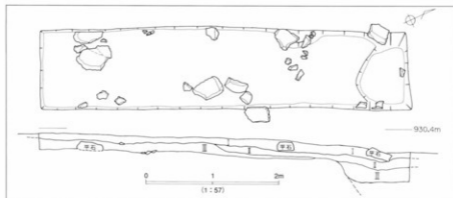
埋没状況を見ると表土（Ⅰ層）の下に、焼土が若干混じる地山をベースとし若干土壌化した暗褐色土（Ⅱ層）が埋められており、その下は他のトレンチと同じ地山をベースとしたあまり土壌化しない黄褐色土（Ⅲ層）であった。

まず、他の三本のトレンチとの大きな違いは、表土を剥がした時点でⅡ層の面に礎石と思われる長径40cmほどの平石が検出されたことである。ほぼ同じレベルで同様の大きさの石もいくつかみられる。それが一つの建物を構成する可能性は高いが、どのように関係するのかはトレンチの規模が小さくはっきりつかめない。さらにⅡ層の直下Ⅲ層の上面にも礎石のような平石が置かれる。いずれも層位的に見て、地表面に存在する礎石群とは若干でも時期差があると考えられる。

ただ、Ⅱ層の出土遺物は多量の瓦のほかは、わずかな陶磁器のみであり、それも表面採集の陶磁器と同じ18世紀末か19世紀のものである。このことは、それほど間をおかずに今回発見された礎石が埋め立てられ、建物の建て替えが行われたことを示している。波多腰英文さんが「信濃奇勝録」「善光寺道名所図会」「若



北Cトレンチ



第9図 北Cトレンチ平面図・土層図

澤寺一山之略絵図」の三つの若澤寺を描いた絵図を比較しているが、護摩堂・方丈については、護摩堂は共通するが方丈についてはそれぞれ描き方が違っていることを明らかにし、それは時期差に起因すると考えた。今回礎石が発見されたことは、建物の比較的短時間での建て替えによりこのような結果となってしまったのであろうか。

なお、このトレンチは礎石が発見されたため、これ以上の掘り下げは行っていない。

参考文献

波多腰英文 2005「若澤寺絵図比較」

「若澤寺を探るⅡ 若澤寺跡調査報告書」波田町教育委員会

○南・北A・北Bトレンチ

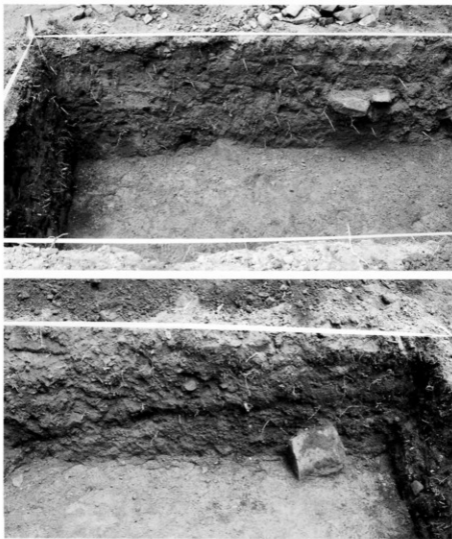
北Cトレンチと違い、表土を除去した段階で礎石等の存在は確認されず、掘り下げを続行する。南トレンチではさらに多量に炭を含んだ土が現れ、最後に人頭大の石を多量に含んだ層となった。すべてのトレンチで基本的には地山の黄褐色土層をベースにしているが、焼土・炭や石の混入の度合いによって、それぞれのトレンチでは明確に分層することができた。しかし、それをトレンチをこえて対比することは最終段階となってしまい、土層図に反映することができなかった。その対比は次の通りである。A層は表土、B層は北Cトレンチにしか存在しない焼土が若干混じる地山をベースとした若干土

壤化した暗褐色土で、18世紀後半以降に盛られたものである。C層は地山をベースとした褐色土で石を含むが、土壌化した土を含まない。また遺物の出土も見られない。D～I層は基本的には地山ベースの土壌化が進んだ暗褐色土に、礫や焼土の量の違いにより区分したが、さらに細分は可能である。さらに層をこえた遺物の接合も見られることから、あまり間を置かない、極端に言えば連続して短時間に埋められた可能性が高い。

まとめると、基本的には大きな石を含んだ土を埋め、次に多量の炭を含んだ土で埋め、最後に地山に近い土を盛っている。さらに、特筆すべきは多量の炭層の存在であり、そこからは明らかに火災で失われた建物の存在が想定される。遺物から火災の時期を考えると、表面採集で得られた遺物のほとんどは18世紀末から19世紀にかけての陶磁器である。それに対してトレンチ内の遺物は、焼土を含む層の中からは16世紀後半から17世紀前半の、ほぼ1世紀の幅に収まる陶磁器が出土している。このことは、炭層から想定される火災に遭ったであろう建物群がその時期に存在し、火災は17世紀後半に発生しかなりの規模であったことがわかる。16世紀後半から17世紀前半は、今まで若澤寺跡の中では確認されなかった時期である。16世紀後半は時の領主である武田勝頼や小笠原貞慶によって寺領の安堵状が出されたり、17世紀前半には参道に丁石（1635年）が整備されたりして、寺勢を大きく拡大していた時



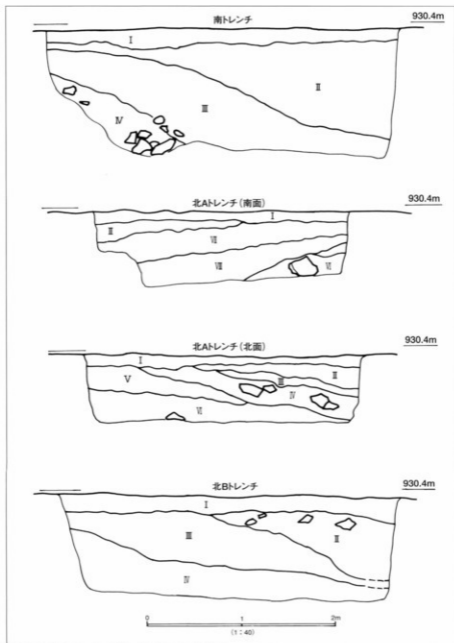
南トレンチ 土層面



北Aトレンチ 土層面

期には間違いはない。特に武田勝頼の寄進状には観音堂建立とあるので、それとの関連も否定できない。

また、『黒川山論裁許図』（1670年）には元寺場に立派な堂（白山権現堂？）があるほか、「若澤寺」と思われる貧相な建物が2棟建っている。火災に遭っ



第10図 南トレンチ・北A・北Bトレンチ土層図

た建物がその2棟であった可能性も十分にある。

しかし、その後の大規模な造成工事はその時代の遺構を根こそぎ大きく破壊している可能性も否定できない。

なお、火災の時期は、遺物からすると17世紀後半以降となるが、文献資料にも延宝元年（1673）にも火災の記事があり、それと一致する可能性が高い。また、造成された時期であるが、遺物からすると17世紀後半から18世紀末という幅の間に収まるのは間違いないが特定は難しい。享保7年（1722）に護摩堂普請の記録があるのでその時期の可能性もあるが、その遺物はなく何ともいえない。また、18世紀末から19世紀初頭という年代は、住職栄豊が大規模な観音堂の普請を始める時期であり、その際に合わせて整備された可能性も強い。ただいえることは、この間の遺物がなくここに宗教的な建物がなかった可能性が高いことである。

また平安時代の10世紀代の灰釉陶器の発見も大きい。わずか2片ではあるが、元寺場跡と同じ時期にここで人間が活動をしていた可能性を示している。



北Bトレンチ 土層面

白山に思う

柳沢 泰夫

白山は、烏々谷の入口に立ち、三角形の優しい姿を見せてくれている。私は新川の生まれであるが、子どもの頃から白山を自分の山のように眺めてきたように思う。

新村小学校6年生のとき、学校の行事で村有林の下草刈りに行ったことを覚えているが、それは白山の山麓であったように思う。同校の百年誌に、「昭和27年7月、6年児童77名村有林視察のため電車で出発」という記述を見つけ、定かではなかった自分の記憶が裏付けられうれしく思ったものである。

もっともこの山を白山とはいわず、子ども仲間では新村山と呼んでいた。「新村山に雲がかかると雨になる」といったりしたが、それはまさしく白山をさしていた。

平成14年の秋、中央公民館の「波田町を知る やまに登ろう」という講座があり、このとき初めて白山に登った。好天の中、落ち葉を踏みしめながらの気持ちのよい山行であった。山頂付近にブナの大木を見つけ、感激したことを思い出す(ブナを見つけるとなぜかうれしくなる私である)。元寺場跡は、発掘調査はすでに終わっており、静かなたたずまいを見せていた。

私は、第2次調査から仲間に加えていただいた。何の知識もないずぶの素人にも、発掘されたすべての遺物が何かを物語る大切なものに思えた。また、専門の先生方の知識の豊かさに感心させられどおしでもあった。

発掘調査は、仮説を立てそれを立証したり、新たな謎に向かってさらに検証するという作業の繰り返しのように思う。遠い時代に思いを馳せながらの夢のある仕事に、一時身を置くことができた幸せを感じている。

小学校のときの下草刈りをした思い出の場所はどこあたりだったのだろうか。そんな小さな謎解きの楽しみが加わり、白山の山麓での作業は、一層心地よいものとなった。



若澤寺出土遺物について

市川 隆之

1. 出土遺物の概要

ここでは平成17年度金堂調査と平成18年度護摩堂・方丈周辺調査で採取された遺物について触れる。金堂跡や方丈護摩堂の表面、平場Cで採取された遺物は、前回報告と同じ江戸時代末頃のものだが、護摩堂・方丈トレンチで採取された遺物は江戸時代前期が中心で、一部室町時代や平安時代のものが混じる。これまで確認できていなかった時代の遺物が確認されたことから、若澤寺の場所にさらに遡った時期から施設が存在していた可能性がでてきた。



金堂跡出土焼物

2. 金堂出土の遺物

図の1・2・46～50（36・37ページを参照）が平成17年度調査出土品である。1が伊万里染付花瓶、2が近在窯の灯明皿、39～43が釘で、42が丸釘で近代のもの、他は鍛造品の江戸時代のものともみられる。46～50が寛永通宝で、48～50が鉄銭である。量は少なく総じて江戸時代末から近代のものである。

3. 中堂救世殿採取の遺物

江戸時代末～近代の焼物が少量ある。3・4が瀬戸美濃産の白磁酒杯、5が同灯明皿、6が灰釉を掛けた瀬戸美濃産小型香炉である。他に近代の染付や白磁湯呑や酒杯片が数点ある。

4. 護摩堂・方丈周辺出土遺物

図の7～12が護摩堂・方丈直下の平場C、13～19が北Aトレンチ、20～25・45・51～53が北Bトレンチ、26が北Cトレンチ、27～33が南トレンチ、34～37と38・44・54～58が方丈護摩堂表採品である。平場Cや方丈護摩堂表採品は江戸時代末頃～近代のものだが、北A・B、南トレンチ出土品は江戸時代前期を中心とし、室町時代や平安時代の焼物も僅かに混じる。また、同じ器の破片が各トレンチに散在している。

平場C採取品は7・8が伊万里染付碗、9が同湯呑、10が同皿、11・12が江戸時代末頃の近在窯の製品で11が灯明皿、12が土瓶蓋である。他に江戸時代末の伊万里碗・皿、瀬戸美濃産の陶器灯明皿や調理鉢、土瓶片、近在の窯製品の陶器片がある。ほぼ前回調査で採取された焼物と同じ種類のものがある。

北Aトレンチ出土品は13が口縁に雷文を施した15世紀の中国産青磁碗、14が胴に丸ノミで彫った溝のある17世紀前半の伊万里碗、15が比較的精良な土を使い透明釉をかけた唐津陶器碗、16が瀬戸美濃産天目茶碗、17が中国産染付皿、18が17世紀前半頃の伊万里皿、19が瀬戸美濃と思われる壺の口破片である。壺は砂粒を多く含む暗灰色の土で、緑色の灰釉が掛かる。他に内耳鍋、瀬戸美濃産の灰釉内はげ皿、灰釉方形鉢（向付）、19と同破片と思われる暗灰白色の焼きしまった壺の破片や耳周辺の破片、産地不明のロクロ引きの焼締



北Aトレンチ出土焼物

陶器の小型壺、白濁した釉が掛かる口端が内側に折り曲げられた焼締鉢、北Bトレンチ出土品と同じものと思われる唐津碗、胴下部が露胎にした伊万里白磁碗と小碗、青磁大皿破片、伊万里と思われる染付皿小片がある。また、室町時代の中国産無文の青磁碗や江戸初期の木葉皿もある。室町時代の焼物も少量あるが、大部分は江戸時代初頭から前期のもので、僅かに19世紀の上絵付碗、瀬戸美濃産染付片が混じる。

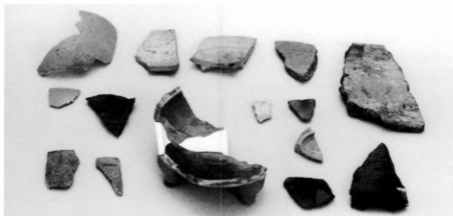
北Bトレンチ出土品は20・21が17世紀前半頃の伊万里皿、22は口をひだ状にし、内面中央の釉を拭き取った瀬戸美濃産内はげ皿である。同じ破片が他トレンチでも出ている。23・24が土鍋の内耳鍋破片で23はその形から16世紀中頃と思われる。25は灰白色の焼き締まった信楽の壺底片で、同じ破片が数点ある。他には中国産染付皿、木の葉皿、17世紀前半の胴部に丸ノミの溝が施された伊万里染付碗、伊万里皿・碗・青磁香炉、産地不明の焼締ロクロ成形の小型壺、19と同じと思われる破片がある。また、江戸時代末頃の瀬戸美濃産染付小碗、上絵付皿破片が混じる。ここも江戸時代初頭から前期の伊万里碗類や瀬戸美濃皿が多く、僅かに室町時代と江戸時代末頃のものも混じる。金属製品は45が内陣の飾りと思われる銅製品、51～53が寛永通宝である。

北Cトレンチからは図示した江戸時代末頃の近在窯産灯明皿1点、他に瀬戸美濃産鉄釉椀片1点のみが採取された。

南トレンチ出土品は27・28が平安時代の灰釉陶器で、27が椀、28が段皿である。29は17世紀前半の伊万里碗で外面に青磁釉を掛け、高台周辺は無釉とする。30が中国産の青磁香炉、31と32が黒灰色の焼締まった陶器で、31は壺



北Bトレンチ出土焼物



南トレンチ出土焼物

だが、茶湯につかう建水ともみられ、32は僅かに白濁した釉が垂れる北Aトレンチ出土の焼締鉢と類品かもしれない。33は大型の四角い火鉢の破片である。他に内耳鍋破片2点、厚手のカワラケ破片1点、小型壺片1点がある。このみ平安時代の焼物が出土したが、



南トレンチ出土の青磁香炉

他は江戸時代初頭のものが多く、出土品の傾向は他トレンチと同じである。

方丈護摩堂の地表面採取品は、34～36が江戸時代末頃の伊万里碗・皿、37が近在窯産灯明皿、38が茶臼、44がキセル吸口、54～58が寛永通宝で、56～58が鉄銭である。ほぼ江戸時代末頃のもので占められる。

4. 出土焼物のまとめ

焼物について年代別に整理すると、以下の通りである。

平安時代 僅かで仔細不明ながら、元寺場と類似時期の陶器がある。

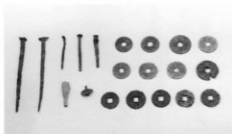
15世紀 雷文帯青磁碗や無文青磁碗がある。量が少なく、中信ではよくみら

れる古瀬戸がない点は気になる。中国産青磁香炉はこの時期か。

16世紀 16世紀後半～末頃の青花皿や内耳鍋はあるが、16世紀前半は当地域でよく出土する大窯製品？も1点のみで、詳細は不明である。

17世紀前半 トレンチから多く出土している。当地域で多く出土する瀬戸美濃産輪秃皿や志野皿・天目茶碗などが僅かで、伊万里が多く、信楽壺や瀬戸美濃産向付など特殊品が含まれる特徴がある。伊万里は肥前陶磁器編年のⅡ期（1600～1650年）が多く、青磁香炉や碗の一部はⅡ-2期（1630～1650年）が含まれる。火災に遭ったか、赤化したものがある。

以上から、焼物が少量しかない平安時代は判然としませんが、室町時代は何らかの施設があった可能性は考えられる。16世紀末から17世紀前半頃は焼物が多く出土しているので、施設が存在した可能性は高い。ただ、地表面の寺跡整地層中から出土しているので、地表面の寺跡に直接繋がるものではないだろう。



金属製品



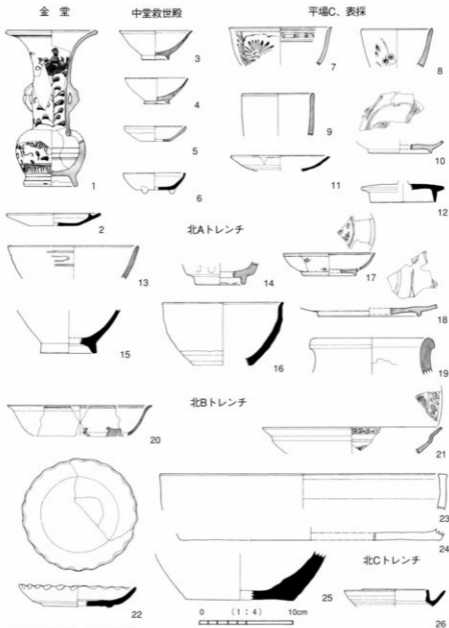
護摩堂・方丈表採茶臼

参考文献

- 藤澤 良祐 1987 「本業焼の研究（1）」
「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅵ」瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤 良祐 1988 「本業焼の研究（2）」
「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅶ」同上
- 藤澤 良祐 1989 「本業焼の研究（3）」
「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅷ」同上
- 盛 峰雄 2000 「陶器の編年1 碗、皿」
「九州陶磁の編年」九州近世陶磁学会
- 野上 建紀 2000 「磁器の編年 碗、小杯、皿、紅皿、紅猪口」
同上

時代	焼物種	器種	金堂	中堂	方丈護摩堂				表探	平場C
			トレンチ	表探	北Aトレンチ	北Bトレンチ	北Cトレンチ	南トレンチ		
江戸末～近代	瀬戸美濃染付・白磁	酒杯		6						
		碗		1					1	4
		皿		1						
		鉢								
		灯明皿		1						
		水滴								1
	瀬戸美濃陶器	不明		4						
		碗						1		
		鉢								1
		蓋								1
		香炉		1						
	伊万里	灯明皿								1
		碗			1				1	2
		小碗					2		1	2
		皿							2	
		仏飯							1	
		花瓶	1							
		壺			1					1
	近在窯陶器	不明					1			
灯明皿		1					1	1	1	
土瓶蓋									1	
德利						1				
戦国末～江戸前期	瀬戸美濃陶器	天目茶碗			1					
		木菓皿			1	1				
		向付			1					
		内はげ皿			2			1		
		志野皿				2				
		壺			5					
		すり鉢					1			
	伊万里	小碗			1				4	
		碗			7		6		7	
		皿			4		9		3	
		青磁大皿			2					
		香炉					1			
		壺					1			
		唐津	兵器手籠			2	1			
	信楽?	壺			1	6				
		産地不明焼締陶器	壺?						1	
			小壺			2	1			
	中国産染付	鉢			1				1	
		在地産土器	皿			2	2			
火鉢									1	
定町～戦国	瀬戸美濃大窯製品	皿		1						
	中国産青磁	碗		3						
		香炉							1	
	在地産土器	内耳鍋			2	4		2		
カワラケ								1		
平安	灰釉陶器	段皿						1		
		碗						1		
不明	伊万里	不明			2	9		9		

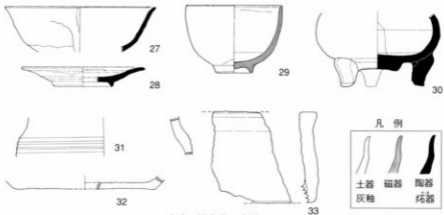
金堂・中堂・方丈護摩堂トレンチ他出土焼物表 (数は破片数)



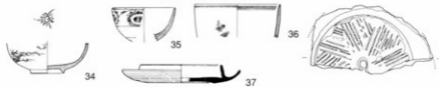
出土した遺物 1 (焼物1/4)

南トレンチ

0 (1:4) 10cm



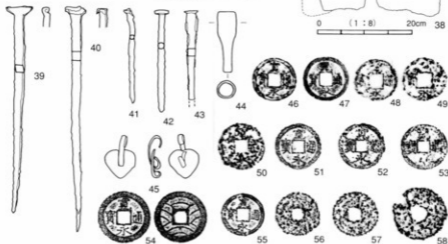
方丈 護摩堂 表採



金属製品・古銭

0 (1:2) 5cm

0 (1:8) 20cm



出土した遺物 2 (焼物1/4、金属製品1/2、茶臼1/8)



西光寺跡について

原 明芳

(1) 記録・伝承の西光寺

『信府統記』に「儀応山西光寺 若澤寺ノ末寺ナリ、島立組上波田村ニアリ」とあるように、西光寺は上波田に存在し、江戸時代には若澤寺の末寺であった。天正18年（1590）の検地では若澤寺領が15石であるのに対して、西光寺は5石である（※1）。しかし、『筑摩安曇古城開記』に「扱水澤西光寺は寺領今の世にもあらば山里かけて千石の余もあるべき寺とかや。依て奥の院を若澤寺と稱し中院を西光寺と號し里の坊を栗田西光寺と號して永徳（1381～1384）の此迄七堂の寺なりとかや、三ヶ寺ながらみな戸隠の支配なりけるが、ある時争論の事ありて天台真言と別れたり、委細は別記にあり」と記載されるようかなりの規模で、若澤寺との関係も単純に寺末寺とは言えない関係であった可能性も持つが、中世以前は謎の部分が多い。

そのなかで、原画は正保2年（1645）に写生され寛政8年（1796）に筆写された「西光寺絵図」（平成16年3月1日町指定文化財指定）は、多くの情報をもつ。それによれば、西光寺は熊野大権現（現波田神社）と光明寺沢を挟んで、御本堂、地藏堂、僧堂、阿弥陀堂、御藏、僧房、仁王門、鐘堂が見られる。男女沢を渡る発心橋に「此ノ橋より若澤寺へ山道一八丁余」と注書きされており、寛永12年（1635）に参道の丁石が整備されたこともあり、ここが若澤寺への参道の起点であることがわかる。元禄年間（1688～1703）頃に若澤寺へお預けとなり、その際に阿弥陀堂と仁王門、地藏堂を現在の位置に移したとされる。なお、地藏堂の本尊は元禄8年（1695）、御本堂は享保2年（1717）にそれぞれ若澤寺へ移されたと記されている。また、元禄11年（1698）作成の『嶋立組絵図』でも、仁王門が西光寺跡から波田神社南に移されている。

その後、阿弥陀堂は『阿弥陀堂縁起』によると宝暦3年（1753）の上波田大火により焼失、『善左エ門文書』によると文政5年（1822）にも焼失し、本尊を移し地藏堂が代わりを果たしたという二つの記事がある。いずれにして



西光寺絵図

も波田神社の南に残るのは阿弥陀堂と仁王門だけである。

このように西光寺は若澤寺の預かりとなるのだが、元文3年(1738)・安永7年(1778)の『什物帳』、嘉永5年(1852)の『資材帳』に阿弥陀堂や仁王門の記載はない。また、明治6年(1873)の『破却若澤寺仏像仏具取調移転願書』には「西光寺 七間・五間 一ヶ所 払代 壹貫匁 弥陀堂 三間・四間半 一ヶ所 払代 六百匁」とあり、一応若澤寺には含まれているが「西光寺」は別に意識されている。『明治8年廃寺取調帳』(1875)には「西光寺」と若澤寺とを区別されて記載されている。文久2年(1862)の『万延二辛酉正月吉日平林織右衛門永代記録帳』には、仁王尊の股くぐりと若澤寺の観音開帳の記事があり、そこには「上波田村 阿弥陀堂」とされている。寛政7年(1795)には阿弥陀堂の所有をめくって、上波多村と若澤寺が争った記録もある。西光寺と若澤寺とは、このような関係であったと思われる。

(2) 残っている西光寺関係の仏像・建物

仁王門に安置される一対の木造金剛力士像(県宝)は胎内銘により元亨2

年（1322）に善光寺妙海により造られ、源重久によって寄進されたことがわかり、若澤寺関係では最も古い年号をもつ。江戸時代には若澤寺の末寺になったとはいえ、もしこの金剛力士像が西光寺のために造られたとなると、すでにふれた中世以前の西光寺の興隆もあながち絵空事ではない。仁王門も、「西光寺絵図」には、金剛力士像と併せて鎌倉時代末期に造られたとされる。阿彌陀堂は先に述べたとおり火災で焼失したため、地藏堂に本尊を移し「阿彌陀堂」と称したといわれる。本尊の木造阿彌陀如来座像は天和3年（1683）作で「佛師 渚村 二木左衛門」の造立札を持つ。なお阿彌陀堂と仁王門は、ともに廃寺になった元禄年間末（1700頃）に現在の位置に移されたと言われる。

このほか、現在は田村堂（国重文）が廃仏毀釈後に移されているほか、丁石をはじめとして多くの石造物が集められている。

（3）現地の状況

平成17年12月に、上波田の寺家町や上町の町並みを含めて、一部参道跡の踏査を実施する。

『東筑摩郡誌』には「再興寺城址 波多村字上波多 城地既に開墾せしかば、構造規模俱に詳ならず。正長年間櫛木正盛此に居りしが事態明らかならず」とある。その再興（西光）寺城は西光寺に隣接して造られたことからその名称が付けられたようである。別名で櫛木城と呼ばれるが、居住者である櫛木氏にちなんでつけられたのであろう。

西光寺城は、寺家町の町並みの北側の梓川との比高差が50mに達する梓川右岸の河岸段丘の最高位にある波田面の南の縁に存在する。段丘の縁は、鉢盛山地の唐沢尾根から流れ出るいくつかの小さな沢によって削られた大小の谷状の地形が見られるが、西側を



現状B



現状C

光明寺沢によって大きく削られ、東側も規模は小さいが男女沢によって削られた谷状の地形によって区画される。『波田町誌』にある「櫛木城址」の「見取り図」では、平面形は卵状に広がる部分を「主郭」、その東側の沢によって削られた区画を「二の郭」さらに東を「三の郭」とし、西光寺は「二の郭」にあった

とされる。現在ではそこに「櫛木城址記念碑」(E)が建てられている。

『西光寺絵図』と比較してみると、西光寺は熊野三所権現(波田神社)と光明寺沢をはさんで存在しており、男女沢が寺の前を通り東を画するように段丘を流れている。位置的には、先ほどの櫛木城址の「主郭」にあたる部分である。また2ヶ所描かれる墓地(うち一つはD)からもその位置が適当と思われる。現在は、平坦な地形でリング畑になっている。地表からは、建物等の寺が存在していたような痕跡、また遺物の出土や伝承はないようである。

また、明治の始めに作成されたこの部分の公図を見ると、いくつかの発見がある(※2)。まず、この台地を取りまくように、まるで堀のように細長い幅3mほどに区分された区画が認められることである。現地を歩いてみると、北側に回る部分(A)に相当する部分は、すでに町道が建設されてしまい確認は難しい。それに続く東側の部分(B)は削られ谷状になっており、南側の部分(C)はリング畑と住宅地の境となっており、リング畑に入る道となっている。このうちCの部分はやや窪んでおり、堀であった可能性は否定できない。もし公図に残る狭い帯状の部分三ヶ所が堀であったならば、その間の谷をつなぐような区画等が東にはみられない。このことから、東には大きく広がらない、南北150m、東西120mほどの小振りのやや整わない卵形の平面形を持つ単郭の館跡といえそうである。西光寺はこの館のような区画に存在したことになるが、『西光寺絵図』には、堀の痕跡をその中に認めることができないので、描かれた17世紀代には既に埋められてしまったであろうか。ただ、仁王門などが既にあったとすれば、館は存在しないことになってしま

う。また、その場所の北縁を巻くように平成7年に町道（通称上波田バイパス）建設に伴う発掘調査が実施された。詳細については把握していないが、その成果も合わせて考える必要がある。

なお、別項で参道調査の報告がなされているが、「若澤寺参道図」（46P）では現在の位置に仁王門が描かれ、そこを出発点に十八丁の距離であることが記されている。そこで気になるのは、仁王門を通過すると一度野麦街道に出て、少し進んで第二丁の丁石を北に折れ波田神社の裏を通り、段丘の縁に行き着くと段丘に沿って水沢に向かっていることである。なぜそのまま野麦街道を行かなかったかという疑問が生じる。それは、起点となる仁王門が先ほど想定した西光寺跡にあったとすれば、そこをくぐり西光寺の本堂を拝みそのまま段丘の縁沿いに西に向かえば参道とぶつかる。光明寺沢を挟んでいるが、自然な道筋で距離的にはそれほど違わない。参道の位置が決まり整備される段階では、西光寺が参拝への起点として大きな役割を果たしていた可能性が高い。

また、小笠原貞慶の天正10年（1582）の寄進状には門前10軒分の諸役を免じるとあり、承応3年（1654）の『住職隆仁記録』によると、御朱印地所の中に「寺家町北側門前屋敷十軒分」とあり、「若澤寺参道の図」には仁王門の前の道の両側に「門前屋敷」という記載がある。もしここが16世紀末より若澤寺のものであったならば、西光寺との関係もより密接であったであろう。

※1 使用した文献資料は次の資料集に収められている。

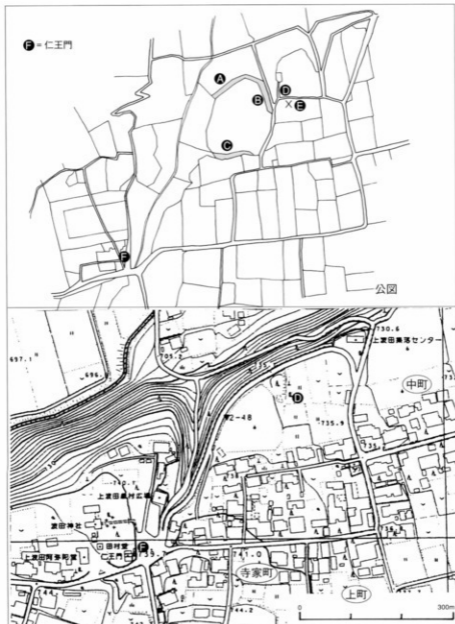
波田町誌編纂委員会 1987 『波田町誌 歴史現代編』

波田町教育委員会 2004 『若澤寺Ⅲ 若澤寺文献資料集1』

波田町教育委員会 2005 『若澤寺Ⅲ 若澤寺文献資料集2』

※2 原因は波田町役場蔵

用いた図は、地番の枝番をはずしてまとめてみた。その理由は、同じ地番で枝番がある場合は、地目が異なる場合がほとんどである。このことは公図を作成する際に同じ所有者で土地が連続している場合は、一つの地番でまとめられ地目別に枝番がつけられたようである。土地の所有関係は、以前の土地所有の関係を引きずっている場合があると考えている。



第11図 西光寺跡付近の都市計画図



若澤寺参道調査について

波田町教育委員会

若澤寺参道は、山中にある若澤寺と麓の上波田集落にある山門でもある仁王門とをつなぐ参道として、若澤寺に参拝する多くの人が行き交っていた。

密教の山寺の参道沿いには丁石が立てられていることが多く、若澤寺の参道にも仁王門前を初丁とし、若澤寺入口までの18丁に計17本の参道丁石が立てられていた（18丁目は若澤寺の入口であり、丁石はなかったとみられる）。この丁石というものは、寺までの道筋と距離を示す道標として活用されたもので、現存する丁石にも阿弥陀三尊の梵字が刻まれており、それぞれ発願心から不退住まで17の祈願もこめられていた。参詣者は、丁石を拝みながら上ることによって菩提心を高め、最後に若澤寺の観音の前にぬかずけるようになっていた。また、すべての丁石に「寛永十二年（1635）乙亥六月吉日」とも刻まれてあり、少なくとも江戸時代初期以降にはすでに参道として大いに活用されていたことがわかる。

若澤寺が明治初年の廃仏毀釈を受けたことにより、この参道沿いに立てられていた丁石も破壊されたり、持ち去られたりしてしまった。丁石は、現在4基が水沢の谷に残っており、5基が上波田阿弥陀堂前に立てられている。残りの8基の丁石は、いまだに発見されていない状況である。

参道についても、廃仏毀釈後しばらくは水沢へ入る歩道として利用されていたようであるが、昭和初期に林道水沢線が開通してからはこの歩道も使われなくなり、次第に参道も山の中に埋もれてしまったと思われる。

今回行った調査では、仁王門前の初丁、18丁目である若澤寺入口、廃仏毀釈から移動した可能性の低いと思われる10丁目のそれぞれの丁石を基に、1丁（109m）ごとに延長を測り、現地及び図面上にその位置を表示した。参道の復元に当たっては「若澤寺参道の図」や現地の状況を参考にルートを選定した。当該地の状況及び位置については下記のとおりである。第12図には、参道ルート及び丁石位置を示した。また第13図に示したのは、江戸時代に描かれた「若澤寺参道の図」（百瀬守江氏所蔵）である。

初丁については、それを仁王門前とする考えと、旧西光寺の仁王門があっ

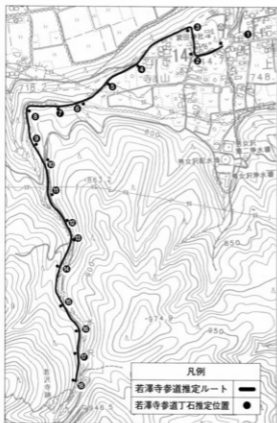
たとされる箇所2つの考え方がありますが、ここでは現在の仁王門の位置を初丁として図化している。初丁から2丁目は、野麦街道に沿って西へ向かう。2丁目で右に折れ、北進した水沢田の段丘沿いが3丁目となる。3丁目から6丁目までの約300mは段丘に沿って西に進んでおり、6丁目からは上波田の水沢から分岐した水路に沿って上がっている。その後は、尾根にあたる8丁目で南へ曲がり、現存する10丁目の丁石に到着するようなルートとなった。10丁目から13丁目までは、現在使われている林道水沢線に沿って参道が続いていたものと思われる。13丁目から15丁目までは、水沢の対岸に昔からあったと思われる歩道が残っており、この歩道を当時の参道として扱った。現存する14丁目と16丁目の丁石については、沢のすぐそばに立っていることや、10丁目や若澤寺入口からとの距離が合わないことから、廃寺後に移動された可能性が高いと思われる。15丁目からは再び林道脇を上がり、最終18丁目で若澤寺入口に合流するルートとなった。

今回の調査では「若澤寺参道の図」と比べ、現存する丁石の位置が当時より移動している可能性がある以上、正確に丁石の位置を把握することはできなかった。しかし、初丁と若澤寺との丁石間の距離がほぼ正確に測れたことや、当時の参道と思われる歩道を発見し、その歩道を参道のルートに選定することができたことから、おおむね当時の若澤寺の参道を再現することができたのではないだろうか。今後は更に検討を重ね、参道ルートの選定を進めていくことが重要であると思われる。

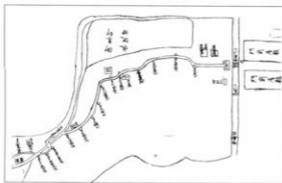
また、調査に併せてこの参道の復元を進め、若澤寺までの散策コースとし、若澤寺跡の活性化につなげられればと思う。

参考文献

宮島 佳敬 2003『若澤寺参道の丁石（菩提心の展開）』



第12図 若澤寺参道ルート及び丁石位置図(推定)



第13図 若澤寺参道の図(抜粋)(百瀬守江氏蔵)



第14図 若澤寺丁石に込められた住心(2003 宮島佳敬)



調査の基準とした若澤寺10丁目丁石

現在水路として利用されている若澤寺の参道
(8丁目丁石付近)

▶ Column 2

若澤寺発掘調査に参加して

山口 琴三

現地の発掘調査には、古老から聞いたことなどを思い出しながら携わってきました。

昼食時には山菜入り味噌汁が波多腰先生と女性たちにより作られ、食べたこともない山菜もあり大変おいしくいただき、午後の作業の活力となりました。

第2次調査までの遺物は、江戸時代が多く古い時代の遺物が出土しないのでガッカリしていました。

第三次調査が平成18年8月8日より10日までの3日間行われ、方丈護摩堂跡へトレンチ工法で発掘箇所を選定し、今度こそ古い時代の遺物が出土するよう祈る思いで調査に入りました。

地下約50cmから60cm掘り下げた辺りより遺物が出土し始めました。原先生が手にとって見て、平安時代の遺物であると大声で作業員に知らせてくれました。

掘り下げること80cm辺りから、今度は中国産の古い香炉鉢が出土、作業員も集まり原先生と細部にわたった説明があり、作業員からも喜びの声が上がりました。他の箇所からも室町時代の遺物が多く出土し、夢中で作業をしました。

今回の調査は、私には参考になりました。若澤寺の歴史が変わるような成果があり、若澤寺の歴史を知るきっかけともなりました。



町内古文書調査でわかった 若澤寺に関する新事実

百瀬 光信

第3次若澤寺総合調査（平成17～18年）の最終、18年8月に護摩堂と庫裏の境内から平安鎌倉の遺物が発掘され、元寺場と同様10世紀末の水沢谷にも宗教施設の存在が確認された。若澤寺は明治初年の廃仏毀釈で、末寺西光寺・法久寺とも消滅したが、町の歴史を知る大きな手がかりとなるため、総合調査を進めてきた。今回の8年に及ぶ若澤寺関係調査主体である考古研究の円滑な進捗を支援すべく、町内古文書の解説と印刷刊行は、文書所蔵者の方のご理解により撮影させていただき、すでに文献資料集第1号、第2号が発行され、第3号も準備中である。

古文書はそのままでは読みにくく、解説活字化により研究者以外にも一般の方々に気軽にお読みいただければ作り甲斐がある。文献資料集の内には、古文書のほか既存の出版物からも、若澤寺関係の部分を一部収録掲載してある。

最も古い武田勝頼寄進状

若澤寺関係で最も古い町内文書には、430年前の天正5年（1577）2月3日の「武田勝頼若澤寺領寄進状」がある。次いで天正10年（1582）7月の小笠原貞慶「禁制」、同8月の「寄進状」がある。続いて小笠原秀政、戸田康長、松平直政、堀田正盛、水野忠職ら松本藩の歴代領主からの「黒印状」や「禁制」などがある。三代徳川家光將軍からは、慶安2年（1649）に寺領10石の「御朱印状」が、以来8將軍からの朱印状の写しがある。

「西光寺絵図」と古城開記

江戸初期の正保2年（1645）に描かれ、（151年後の）寛政8年（1796）に写された「西光寺絵図」は、余白の墨書きには若澤寺の別当寺だった義応山西光寺の説明が綴られている。特に重要な事柄は「安養寺、宗泉寺、円明寺、了泉寺、即現寺は西光寺の塔頭たりしといふ」とあり「仁王門、阿弥陀堂は元禄頃移転」とある。

高遠の藩儒である中村仲綜編纂の「落原拾葉」に載る、「筑摩安曇古城開記」

の記述の内に、上波田阿弥陀堂所蔵の『西光寺絵図』にある墨書文と符合する点がある。郷土史家の故堀内千萬蔵氏が「古城開記は波田若澤寺及び塔頭たる西光寺を力説するあたり、或は其等の寺僧の作かと思はれる」と考察している。

『筑摩安曇古城開記』に「奥の院を若澤寺と号し、中院西光寺・里の坊別当栗田西光寺と唱へ、永徳のころ（1381～1384）七堂の寺なり」「三ヶ寺ながら戸隠の支配なるが、争論のことありて天台真言と別れたり」とある。

隆仁記は古い財産目録

承応2年（1653）の『住持隆仁記（波田村の歴史＝百瀬長流編）』には「正保二年（1645）十月回録（火災）之有 靈仏靈宝等並ニ御印書ノミ出シ 旧記録箱焼失ス由エニ粗記シ置焉者也」「正観音、千手観音、薬師如来日月光菩薩、不動明王、仁王門と金剛力士、阿弥陀如来、弁才天、宇賀神、三十三神、十王、田村將軍像、鬼人飛行剣、軸三本」とある。「天文の頃（1532～1555）寺領減少シ諸堂破壊退転同様ニナリ、当時ノ寺場ヘ下リ候。甲州武田家ヨリ寺領永十一貫百五十文下シ置レ山林東木ノ小口、西山王何レモ畝切り、外ニ寺中屋敷一ヶ所（40間4面）、門前屋敷一ヶ所十軒分（寺家町北側）」「丑年（1648）水野出羽守様御胤ナサレ右所領残ラズ御朱印下サレ候」「辰御検地（1651）ニ田畑合セ一反二十六歩阿弥陀堂分、御朱印田畑九ヶ所八反一畝歩」と見える。奥氏文書から勘考すると隆仁記の「当時の寺場」とは「つきがね堂場」に該当するが西光寺のことか？西光寺はこの時から約50年後の元禄末（1700頃）に無住若澤寺預りになった（西光寺絵図）が、太閤検地では若澤寺領15石、西行（光）寺領5石、浄（盛）泉寺領5石と独立寺で、寛永年間（1624～1644）まで23石9斗の持高がある。

現在の地に下りてきた年代

松本藩水野氏が享保9年（1724）に編纂した『信府統記』に「慈眼山若澤寺 当寺ハ今ノ地ヨリ式拾七八町山奥ニ有リシガ、長禄二年（1458）今ノ地ニ移ス」とあり、これを引用し『信濃奇勝録 白田の井出道貞著天保二年（1831）』にも「古は三十町余山上にあり長禄二年今の地に移し 慈眼山若澤寺と号す」とある。

ところが地元庄屋奥儀左衛門の『萬用重宝記』や同家文書には「水沢寺の

わけ 文禄三年（1594）申午六月十八日 元水沢より つきかね堂の場所へ引く也。六十年過ぎ承応三年（1654）年今の堂場へ上る。水沢住持別当龍賀弟子龍見法印」とある。享保10年（1725）水野家改易の後松本藩主に入った戸田家では文禄と長禄に140年も隔たりがあるために、庄屋奥氏へ再調査を行っている「享保十六年（1731）御代官 宮本友左衛門殿お尋ねにつき組手代松田勘之丞殿へ書き上げ」が前記「水沢寺のわけ」。これで戸田氏は誤りを訂正したらしい。『信府統記』は「山奥より今の地へ移す」など誤謬を犯し世に広めた。波田の古文書の総てに「文禄三年 元水沢よりつきかね堂の場所へ引く也」とあり、『信府統記』に倣っていない。『水沢不動院の記録写』元文二年（1737）平林弥五右衛門記』には「本尊行基菩薩の御作、大堂に御座候。中興坂上田村丸利仁公鬼神退治の御願成就、大同元丙戌（806）白山の下寺場え御移し堂御建立の由し、古来の記録隆憲と申す住持の代焼失…」とあり、この史料にも「長禄二年移転」の記述は見られない。

西牧氏寄進はあやまり

名古屋の園田利忠編纂『善光寺道名所図会』は、嘉永2年（1849）年に発行。「若澤寺拝殿鰐口文字=宝徳二年（1450）六月一日 院主為宥聖 奉施入鰐口 讃岐守信兼」片方に「立願成就敬白 若澤寺鰐口 細野七右衛門 文禄三年（1594）四月八日」とある。この鰐口について「西牧信兼が室町中期若澤寺の施主となった証拠」という通説は誤りで「信兼は鰐口を西牧郷の寺院に施入。後世廃院から払出された旧器物を文禄始めに、細野仁右衛門が入手し、自分の氏名や立願、紀年月日若澤寺鰐口と裏側へ彫刻若澤寺に納めた」が真相である。

畑郷に平姓仁科氏進出

明治9年（1876）の『波多村誌』の中に「波多村 本村古時捧ノ庄ニ属シ畑村ノ称ヲ用フ大永年間（1521～1527）分子テ上下波多三溝ト三ヶ村ニナリ明治七年十月合併シテ一村トナリ本村ノ称ニ復ス 信濃国捧ノ庄畑郷 慈眼山若澤寺奉手観音 長禄二年（1458）施主平朝臣六翁 右ニ依リテ捧ノ庄ト記載ス 最古物故エ存シ置ク可キニ心無クコレヲ毀ツ 只松田九郎ナル者写スノミ」。波多村誌の鰐口は現物が残っておらず「捧ノ庄」の銘文についても、疑問視されていた。

しかし昭和50年代になって、波田町水沢の若澤寺跡参道のわきから、供養碑の下部が土砂に埋まっていた部分より次の銘文を発見した。

〔若澤寺跡 参道供養碑銘〕

施主 平朝臣六翁沙弥盛高 長禄二年五月二十八日

この碑銘がみつかり、室町中期の長禄2年(1458)という、戦国以前の時代に早くも北安曇地域最大の豪族平姓仁科氏が、守護小笠原氏支配下の捧ノ庄畑郷へ進出を始めている。本来は源姓波田氏の祈願寺の若澤寺一山だが、このころ波田の地域支配に変化があったことがうかがえる史料である。

波田殿に村上源氏系と甲斐源氏系があった

波田郷に平安末の保元平治(1156~1159)ごろ村上為国弟源盛国が畠判官代で下り、鎌倉末期の元亨2年(1322)源重久は西光寺仁王尊の大檀那とあり、永享11年(1439)に源信盛は若澤寺梵鐘を寄進、およそ270年領有した。

若澤寺一山の施主源姓波田殿に二系ある。『文政年間見聞記(森井氏控)』に「義応山西光寺房は神事を兼ね 若澤寺別当にこれ有り候 教顕和尚これを勤むる事、周防山は応仁元年(1467)源長昭指揮により、道祐五代の僧梓川寺と改めて中若手に移す、村上由緒なり」とある。

また『笠系大成(溝口家記)』に「村上殿ハ上文字紋、御家中ニ候波田モ同前ニ候」『波田役筋帳』に「無量山再興寺ハ村上ノ通字ナリ、代々周防守ト称ス、義応山西光寺ト其時改号ス、周防山安養寺モ村上ノ由縁」と村上源氏が見える。

戦国の源姓波田殿は『萬用重宝記』に「波多ノ城主 新羅三郎義光朝臣、信濃守源信成末孫 波多権七郎信重 天文年中(1552)相潰レ申シ候」とあり、『二木家記』に「波田は櫛木ノ末ナリ」とみえ、『小笠原家士分限録』に「波田山城主 高百四十貫文 波田数馬十騎」とある。

守護の小笠原氏は甲斐源氏新羅三郎の末孫である。櫛木政盛も小笠原の一門で畑再興寺館へ入り、子孫の波多信重は甲斐源氏小笠原末流と思われる。

残したい町内古文書

波田町内の古文書の大部分は江戸中後期のもので、わずかに若澤寺旧蔵や安養寺の文書の中に中世の古文書がある。町内文書の中にも中世ころの事柄を記したものも散見されるが、書き継ぎであり時代が錯綜混同しているもの

があることから、十分な分析と考証をしないでは通用しないようだ。中世や近世初頭の文書に比べると、近世中期以後の若澤寺関係町内古文書は、良質で信頼性の高いものが多い。上波田阿弥陀堂所蔵の「西光寺絵図」は、描かれて年が経ているがよく無傷で残されており、その墨書文字は史料としての価値がある。

旧若澤寺住職の末孫が分割所持されている本山智積院よりの諸免許状や、領主の黒印状、血脈、訴状など大切な史料が多いが、他県にあり行方不明になる心配がある。

町内の「寛保三年萬用重宝記」、「元文三年若澤寺什物帳」、「宝暦四年初法談始終雜録」、「安永二年御開帳記録」、「承応二年住持隆仁記」のほかに明治初年の廃寺の時の記録文書など、若澤寺研究には欠かせない大切な古文書は今のうちに複写し保存が必要である。

十迦舎一九作「信州水沢観音利益 雑食橋由来」は、松本平では発見できなかった原本を、旧安曇村役場の山本信雄氏が東京の文書館で検索され、コピーを提供いただいたことに対し、感謝申し上げる。



絵図「信州水沢観音利益 雑食橋由来」より

若澤寺発掘調査に臨んで

百瀬 くに江

せみ時雨に混じり、賑やかな笑声が山間に響き渡っています。そうです、鍋を囲んでの発掘関係者の方々の楽しい食事の一時です。出土した遺物について話が咲いています。

私が町の文化財保護に関わったのは、第2次若澤寺の総合調査の行われている平成13年、遺跡周辺の現場の下草刈り作業のときでした。試掘調査のための不要木の伐採、表土清掃で木々の根や長年に亘る堆積物の除去、また梅雨期には汗と泥にまみれて遺物等に配慮しながらの大変な作業でした。しかし大きな礎石が次から次へと列をなし顔を出してきた時、また遺物の一部や古銭が出土した時の関係者の喜びはひとしおで、疲れも忘れ夢中で土を払いのけました。原先生のご説明によると「この礎石の並びからすると、まさしく往時を語る版木の絵図や地形とはほぼ一致します。」とお話でした。

若澤寺は明治初年の廃仏毀釈により廃寺となり、それにともない寺に関連した数々の建造物が町外の寺に移築されています。江戸時代後期には「若澤寺一山之略絵図」のような立派な寺が完成し「信濃日光」として称えられ、多くの参詣者が訪れ隆盛を極めたとのこと。文化財保護委員として移築された建造物を見学する機会がありましたが、あまりの立派さにしばし見入ってしまいました。もしこの若澤寺が今でも現存していたならば、波田町も寺の町として栄え、世に名を轟かせていたのではないかと考えるととても残念に思います。

現在、山深いこの地には大きな礎石や苔生した石垣と数体の石仏がひっそりと残っているのみですが、この場所に佇めば往時の寺がいかに偉大であったのかをしのぶことができます。私たちはこの発掘に携わったものとして、この史跡を後世の子どもたちに伝えてゆくためにも多くの方にこの地に気軽に足を運んでいただき、憩いの場としてまた町民の誇りの場所となるよう、これからも整備して守り続けていきたいと思っています。



今も現地でひっそりと佇む石仏



若澤寺廃仏毀釈とその後

田中 昭三

慶応4年(1868)3月18日新政府は、神仏分離令を發布、日本の神仏混淆の信仰に廃仏毀釈の嵐が押し寄せた。この年9月に明治と改元、松本藩では明治3年(1870)8月に廃仏毀釈令を發した。神仏分離の方針は激しかったようで、藩主は自ら民衆の前で菩提寺全久院にあった戸田家先祖の位牌、仏像、仏具を投げ捨て焼却したという。

真宗寺院護持につとめた松本市裏町の正行寺の佐々木了綱師や、大町靈松寺の曹洞宗安達達淳師のように、身を挺して藩吏と渡り合って存続した寺院もあったが、松本藩領の大半(約8割)の寺院は廃寺の憂き目を見た。

若澤寺も例外ではなかったが、廃寺に至る別の要因もあったようである。松本藩の強硬な廃仏毀釈の方針のほかに、村役にあった有力檀家の神道神葬祭への改宗、密教寺院のため他宗に比べ檀家が少なかったことが挙げられる。

若澤寺は寺領10石、境内峰周り3里半の広大な山林に囲まれていた。天明5年(1785)智空坊(栄豊)が住職になると、檀家(当時80軒余)に相談することなく、山内の伐採禁止の桧まで伐り出して、松本の薄川大橋の本町大橋の架橋を請け負った。また、松本藩吏との癒着関係や、本山からの談林所としての資格を認めてもらうために大般若経600巻を購入し借金を残したことが挙げられる。密教寺院では妻帯肉食は禁じられていた。鎌倉時代浄土真宗が創始されてからは、地方寺院の僧侶の妻帯は半ば公然と認められていたようである。しかし若澤寺では、寺中寺外に妻以外の婦人を置いた問題が檀家や信者のひんしゅくを買い、近隣の同宗寺院とも円滑を欠いていたことが、影の要因としてあったのではと察せられる。栄豊は45年間住職を務めたが、文政年間隠居し天保8年(1837)入寂。栄豊の後を継いだ克朝は、檀家とも円滑にいったようで、本山より談林所として認められ、中堂救世殿、田村堂の屋根を銅瓦に葺き替え、堂塔の大修理を行った。観音信仰の寺信濃三十三番観音霊場として参詣者を集め、寺運隆盛の兆しも見えたが、万延2年(1861)入寂した。その後わずか数年後には廃寺の嵐を受けることになった。

信濃日光と称された壮大な伽藍も、廃仏毀釈により明治4年(1871)頃よ

り移築されたり、取り壊され、主な建物、仏像、仏具は盛泉寺をはじめ近隣の寺院などに移された。明治6年(1873)7月戸長松田八朗から松本県へ出された「奉願口上之記」には破却若澤寺仏体の調べが掲載されており、その内容は下記のとおりである。

不動尊木像	1体	阿弥陀如来木像	2体
釈迦如来木像	1体	両大師木像	2体
薬師如来□像	1体	正観音木像	1体
三十三仏木像	33体	四天王木像	8体
日光月光脇立木像	2体	十二童子木像	12体
薬師如来木像	1体	正観音銅仏	2体
寶頭盧木像	1体	仁王尊木像	2体
毘沙門天木像	1体		
若澤寺仏具取調べとして			
天蓋	1	金台曼荼羅	2幅
環珞	1	観音厨子	1
大般若経	6箱		
以上、盛泉寺へ預ける。			

庫裏7間×8間、勝手3間×10間は婦農僧水沢堯賢、水沢芬々兩人として与える、と記されていた。

その他の建造物、什器類50品は売却され学校設備の充実に当てられた。その一部を記すと、

観音堂5間×5間、鐘、土蔵2棟、御供所、護摩堂8間×7間、薬師堂、門、山番小屋、板戸、障子百三拾本、襖六十四本、帯戸、大戸、桶、千石、掃臼、石臼、高塀、花立、輪燈、銅瓦などが書き上げられている。

現存する若澤寺関係の主な建造物について言述する。

中堂救世殿(水沢観音堂)は解体され盛泉寺に保管されていたが、明治20年(1887)代に盛泉寺本堂裏の敷地の関係から若干縮小し再建され、昭和59年(1984)に新築された。堂内には町指定文化財の金亀多宝塔(若澤寺の厨子)が安置されており、四天王が四方を守護している。

金堂は松本市今井の正覚院へ移築されている。現在堂内には旧本郷村(現

松本市) 真観寺の正観音像が祀られ、観音堂として往時の姿をとどめている。

護摩堂は当初は旧今井村(現松本市) 役場として、そして今井農協の建物を経て、現在は唐破風の玄関部分が正覚院の方丈の玄関として再建されている。また、欄間も同寺院に保管されている。

鐘楼は安曇野市野沢の瑠璃光寺へ移り、明治24年(1891) 下角(旧梓川村) 恭俊寺の鐘楼建築に際し、枅組が使われた。

法護印塔は山形村竹田の穴観音境内に移築。

田村堂と金剛力士像は解体復元工事が行われ、上波田阿弥陀堂境内に祀られており、現在は、仁王尊股くぐり祭りとしても有名である。

若澤寺伝来とされる県宝の銅造菩薩半跏像(弥勒菩薩) 及び銅造伝薬師如来坐像御正体残闕は、盛泉寺に祀られている。そのほか仏具等は、在家に移っているものも多いという。

若澤寺の跡地 8 反 1 畝 15 歩(公園では9103番地10885m²) については、売渡人上波多耕地、管理者波多村長百瀬孝作として、そして買受人藤澤左太郎で地元有志40人が40円で買い受け、遺跡を保存することになった。40人は地元横町、上波田、淵東の集落の人たちである。

中堂救世殿跡地には、「水沢観世音霊場」の高さ2メートルを超える石碑が建っており、両脇には大正3年銘(1914)の石灯籠が立てられている。その前庭には相撲の土俵の跡があり、昭和初期まで観音例祭に併せ、素人相撲が奉納されていた。

上波田では、祭りの日には人通りが多くなると川の水がにごるから朝早く水を汲むようにとか、大正初期には相撲見物に丸髻の女性が来ていたなど、賑わいを見せていた往時の話を古老より聞くことができる。

水沢観音例祭は、現在は盛泉寺水沢観音堂で奉賛会により5月2日に執行され、本尊がご開帳されている。

水沢の瀬音と梢を渡る風の音は昔と変わらないが、蒼生し崩れかけた石垣に寄ると栄枯盛衰の無常を痛感する。

参考文献

- 波田町教育委員会 1979『波田町の文化財 波田町の石造物編』
波田町教育委員会 1987『波田町誌(歴史現代編)』
熊谷 定義 1997『廃仏毀釈物語』



盛泉寺に移された若澤寺中堂救世殿

▶ Column 4

若澤寺現地調査を終えて

藤澤 道子

平成11年から、8年間にわたる若澤寺の総合調査が無事終了しました。私は、平成15・16年度文化財保護委員として第2次調査に参加し、第3次調査には都合のつき次第参加させていただきました。

平成15年6月13日調査初日は、好天に恵まれ青葉も万緑に変わり、春蛸も競って全山を賑わせていました。地鎮式後の仕事は、調査に支障を来たす立木の伐採と移動。切り出した材木と腐葉土の焼却は雨の日も続けられ、森の中での仕事は濡れながら行いました。下準備も終わり愈々トレンチに取り掛かる班、表土を少しずつ削り遺物を探す班に分かれ、小さな陶器のかけらや出土品は大切に保管され、原型に近い遺物に出会ったときなど、往時の読経や線香の香、人々の賑わいも聞こえてくるような思いです。文献どおりに位置や方向を確認し、掘っていくとまさに「若澤寺一山之略絵図」の通り礎石が現れ、地籍調査の面白さに嵌ってしまいました。

第3次調査では青磁の香炉が出土し、正式な鑑定を待っています。また、コンピュータにより小さな遺物から、原型を作り出す技術の進んでいることを知り、驚きました。明治の廃仏毀釈を免れ「信濃日光」として繁栄していれば、今日の波田町は門前町として賑わっていたと思われそうです。

これからも、波田町の文化財の取り組みに大いに力を入れていただき、波田町の誇りうる文化遺産として、子孫に語り伝えていくことの大切さを感じました。

これやこの読経のごとし蛸しぐれ 道子



野麦街道沿いの調査

大月 康雄

はじめに

松本平と飛騨高山との通行は、安房峠越えが主であったが、寛政2年(1790)平湯の番所が廃止になってからは、もっぱら寄合渡まわりの野麦峠(標高1673m)越えをすることから野麦街道と呼ばれることになった。一般的に言えば「ひだみち」であり、高山方面の住民からすれば「ぜんこうじみち」でもある。

かつてこの野麦街道は信州松本方面と飛騨高山方面とを結ぶ、歩荷や牛方なども通う交易の道として、また若澤寺参詣の主要参道であり、岡谷、諏訪方面の生糸業華やかな頃、大勢の製糸工女たちが歩いた道でもあった。往時下三溝、下波田、中波田、上波田の街道沿いには人家も多く往来の主要道であった。一方森口から鍋割、淵東辺りまで延々と続く御林と呼ばれた官林が、明治期に入り順次払い下げられるに従い人家も増え続け、産業、経済、文化も含め主要交通路として発展を遂げ、村の中心となっていくた。

元禄11年(1698)の絵図によれば、

ルートⅠ 下三溝から森口、鍋割、淵東

ルートⅡ 下三溝から森口、三日市場(下波田水神社周辺)で分岐して淡路、上波田

ルートⅢ 下三溝から森口、下波田、中波田、上波田

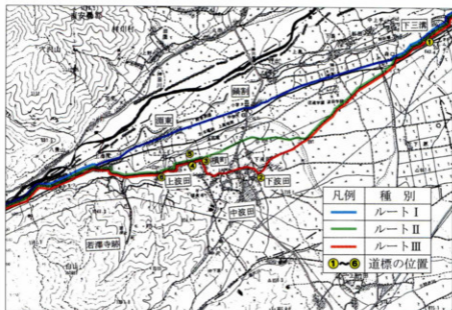
の三通りの道が描かれており、そのルートは第15図に示したとおりである。ここではルートⅠ、ルートⅢの街道沿い(上波田周辺については枝道も含む)の屋号と道標、旧字名について調査を行った。

屋号の概要

昭和初期頃まで屋号はかなり広い地域で用いられており、昔は婚礼や葬式などのときに膳や碗などの貸し借りは当たり前で、他家のものと間違わない

ように個々の所有権を示すしるしでもあった。特に同じ姓の多い集落はいわば共通語として重宝されていた。

松本平周辺では屋号のことを「エーナ、エエナ」(家名)と発音しているところもあると聞くが、ここでは「屋号」として取り上げることにする。



第15図 昭和30年代の地図にみる野麦街道と道標の位置

1 屋号の命名

当時誰が屋号を命名したかの観点で見ると、次の3つの要素に分類されるという。

(1) 共同命名屋号

同じ集落の人々が講中などの集いでその家屋の建立場所や特徴、特に初代の人の名前と呼ぶなど、いかにも納得できる名をつけ、それが次第に定着してきた屋号。

(2) 名乗り屋号

戸主(世帯主)が自ら命名するのが主であるが、同族のなかの長老などに依頼し、その家にふさわしい屋号をつけてもらう。但し、その集落内の賛同なくしては通用しなかったという。

(3) 拝領屋号

藩主から拝領したものではないが、永い間勤めたり、奉公した家の主人などからいただいたものが多いという。

以上、3項目とも文字を意識していない命名であったが、必要に迫られて与えた漢字には、その意味にはあまり関係のない漢字が用いられていることが多かったという。

2 野麦街道沿いの屋号

野麦街道は、先に述べたとおり町内を大別して三溝、下波田、中波田、横町、上波田、鍋割、淵東の7つの集落を通過している。

大半の家では屋号を有しており、そのほとんどは家の生業やいわれなどの歴史を表すものである。以上、屋号命名時の諸要素をもとに、野麦街道沿いの屋号について一部を紹介する。

(1) 家屋・屋敷の所在位置をいう屋号

地形、方位、位置、履歴を考慮したもので、カドヤ、ナカヤ、オオニシ、オオヒガシ、ワデ、クモイ、ゴジュウネなどが挙げられる。

(2) 樹木・近在の神仏などの目標物となるものをいう屋号

屋敷周辺や屋敷内の特徴ある樹木にちなんだものがある。
ヤマノカミ、ドウロクジン、フジヤ、ナシノキなど。

(3) 本家分家をいう屋号

フルヤ、シバキリ（集落で一番早く住み始めた家）、オエ（各地区の元祖格の家）、ナカヤ（集落の中心にある家）、オオワデ、インキヤ、シンヤシキ、シンヤ、アラヤ、シntaxなどがある。

(4) 生業名をいう屋号

農業、林業、鉄工、木材を扱う工人の家、その他の諸工人の家、製糸、染色、服飾、理容、精米、製粉の家、運送業の家、商店であることを示している家など。シオヤ、ミハラヤ、イトヤ、ワタヤ、シャコ、コウヤ、タネヤ、セントウヤ、キンショウ、カネカ、カジヤ、タマリヤ、ウシヤ、タマヤ、ヤマシロヤ、バシャヤ、バシャタテバ、旅籠屋ではトウゴクヤ、カンワヤ、ツルヤなど。この項の屋号を持つ家はかなり多く、種類も多彩である。

このように屋号の呼び方は多種多様で、当時の集落に住む人々の、特に漢

字に対する教養のレベルの高さが推し測れるともいわれている。

3 若澤寺と関連性のある屋号

野麦街道沿いの屋号の中では、若澤寺などの寺院に関係すると思われる屋号も見受けられた。横町地区にある屋号「ダイモン（大門）」、上波田地区にある屋号「サイコウジ、セイコウジ（西光寺）」がそれにあたるか。

大門については、正確ではないそうであるが近隣の人々の話から「元は若澤寺の大門」があったらしいとのことである。なお、当家では若澤寺ゆかりの資料を有していたが、昭和初期の火災のため焼失してしまったそうである。

「西光寺」については、江戸時代に上波田にあった西光寺からその名が取られていると思われる。旧西光寺は、若澤寺の塔頭（末寺）として、かなりの規模を誇り若澤寺と深い関係のある寺であった。元禄年間に若澤寺へお預けになったが、幕末まで西光寺の名前が残るなど、若澤寺の歴史を語る上で切っても切り離せない関係にあった。この「西光寺」の屋号を持つ家は、旧西光寺があったと思われる箇所の非常に近い位置にあることから、かつて寺院となんらかの関係性があった可能性も否定できない。

寺院には直接関係ないが、前述の「命名時の諸要素」の各項目に該当する屋号がすべての地区で同じ呼び方で使用されていることが窺える。

4 野麦街道沿いの道標

道標については、下三溝と上の段の野麦街道沿いに6基が確認されている。その位置は第15図のとおりであり、63ページの表のとおり表記されている。年号の判明しているもののすべてが大正時代のものであり、一部建立位置に疑問のあるものもある。なお、若澤寺関連のものとして、中沢の地藏洞地蔵にも道標（丁石）が存在する。

5 野麦街道周辺の旧地名

地名は大別して、生活環境や歴史的背景に基づいてつけられたものが多いといわれている。環境を用いたと思われるもののなかでは、方角・地形的なもの、歴史的なものからは伝承、伝説、信仰の対象となるような神社、家敷、館、城郭などに関連していると考えられる。しかし、ある時期に一括してつ

けられたものではなく、長い時代を経て消滅したり語源不詳の呼び方や、当て字の変遷をも辿ってきたであろう。検地帳や、小地名目録などに記載されている地名などから、下波田、上波田地区を中心に社寺関連と思われるものを掲げてみると、承応元年（1652）頃より西光寺、寺山、阿弥陀免、宮之窪、寺家屋敷などは、若澤寺と関わっていたらと推測できるが、みとふかいと（御堂海渡）、盛泉寺、堂平、水沢山、水沢はた、水沢よこて、堂返原などはどうかであろうか。今後の調査が期待されるところである。

6 終わりに

近年は生活用式の多様化などから、屋号で呼び合った習慣もすっかり薄れてきてしまった。地名についても農業の近代化と称して、村内ほぼ全域で圃場整備事業が実施され、地名の変更も余儀なく、居住地内でも区名を呼ぶことが通常化してきた。屋号にしても地名にしても往時の集落の人々の心情だとか、生活内容そのものがその地域の中で密接につながり反映されていたであろうし、そんな歴史的な情景をも想像することができる。大切に後世に伝えていきたいものである。

暗中模索でこの調査を行ってきたが、多くの識者、先輩諸氏のご協力を賜りながら、とりあえずまとめられたことに対して、心より感謝申し上げたい。浅学非才ゆえ至らぬ点が多々あると思うので、ご叱責請うことを願ってやまない。

参考資料

- | | |
|----------|----------------------|
| 黒岩 功 | 1980『思い出のアルバム』（波田関連） |
| 長野県教育委員会 | 1984『歴史の道調査報告書』 |
| 波田町教育委員会 | 1987『波田町誌（歴史現代編）』 |
| 岡野 信子 | 2005『屋号の語彙の世界』 |

※今回、野麦街道沿いについて調査しましたが、屋号については個人情報の保護等を勘案し、本報告書では個人名の掲載はいたしませんでした。なお、調査した資料につきましては、波田町教育委員会にて保管しております。


番号	刻銘等	造立年代	写真	番号	刻銘等	造立年代	写真
①	向 右和田村及神林二通ス 左松本市二通ス	大正 2年		④	中波多二通ス 松本道 新島々方面	大正 5年	
②	塩尻 松本 道	年代 不詳		⑤	渡船場ヲ経テ梓村二 至ル 赤松ニ至ル	大正 5年	
③	下波多ヲ経テ山形塩尻 方面 淵東渡船場 島々方面	大正 5年		⑥	山道 赤松ヲ経テ島々白骨二 至ル	大正 5年	

表 道標の刻銘と写真

若澤寺名物 サバ缶・山菜鍋

山下 京子

「そろそろ下へ行く時間だよ。」11時を少し過ぎた頃、まわりの人から声がかかる。私は作業を中断し、そこらに落ちている杉っぱを拾い集めながら坂を下る。

下の段には、発掘当初から使っている三方を石で囲んだかまどがある。まず、かまどに拾ってきた杉っぱと、枯れ枝を入れて火をつける。それから大鍋に野菜を入れる。中嶋さんが家で刻んで持ってきてくれた大根、にんじん、じゃがいも、ながねぎ、時には豚肉や油揚げが入る。そして最後に、かならずサバの水煮缶を入れる。登り口の水沢で汲んできた水を入れ、鍋を火にかける。

鍋の中の材料が煮立った頃、波多腰先生が下りてくる。両手にタラの芽、ウド、ホップ、ミズナなど、いろんな山菜を抱えて。先生曰く「タラの芽はちょっとのびてくらいのほうが、煮ればおいしく食べられるよ。」ということで、山菜はすぐにきざんで鍋の中に。しばらく加減をみて味噌を入れる。いい香りが上の作業場に届く頃、これもだれかが家でこねてきてくれた小麦粉を手でちぎって、ぐつぐつ煮立っている鍋の中へ入れる。少したつとすいとんが浮かび上がってくる。

ちょうど12時になった。みんなが下りてくる。それぞれ思い思いの場所に座り、具沢山のお汁をおかずには持参の弁当を開く。食べながらの話題は、発掘のことはもちろん、若澤寺があった頃のこと、まだ波田村だった時のこと、これからの波田町のことなど興味深いことばかり。あちらこちらで次々に話の輪が広がる。



鍋を囲んでの楽しい昼食

食べ終わって、ふと上を見上げると、木々の梢の間に立ちのぼる白い煙。まだまだ話の尽きない人、横になって休む人。時間が止まったような若澤寺跡で、楽しい時間はゆったりと流れる。「さあ、そろそろはじめるかい。」という声はどこかからかかるまで。

発掘作業を体験して

元木 陽子

今から十数年前のこと、子どもたちとハイキングがてら、昔あったとされるお寺を確かめに上波田神社から山の中に入っていました。草を掻き分け掻き分け登っていくと、杉木立の中にそれらしき立て札とお地藏様が二体。よくまあこんな山奥にお寺が建てられていたものと驚きました。まだ当時は発掘調査がされてなかった頃で、木々がうっそうと茂り、異界に迷い込んだような不気味さで、スグスグ引き返してきたのを覚えています。

それから何度か山菜採りやきのご狩りで若澤寺跡を訪れ、元寺場跡や白山にも登るようになると、家の近くのこの山が、霊験あらたかな宗教的空間であったことに興味をひかれるようになりました。

今回、文化財保護委員に委嘱されるという好機を得て、遺跡発掘を初めて体験させてもらいました。

蝉時雨の中、発掘作業の手を休め、華やかだった頃の若澤寺を思い描いていました。絵図に描かれていたお寺の全様が目に浮かびます。「ここが護摩堂・方丈。だから食器が沢山出土するのだなあ。石垣の上は中堂教世殿。あの辺りにしのぶ杉が生えていて、恋の願いを聞き入れてくれたのだ…」等々と。



発掘作業風景

私にとっては波田町は故郷ではないのですが、歴史を知り、その解明の一端に加わせていただくことで、故郷以上に身近なところとなりました。何年も前から発掘調査に携わっていた先生方、教育委員会、文化財保護委員やボランティアの方々に感謝いたします。

足元の歴史を知ることで地域に誇りを持ち、地に足の着いた心豊かな人間に成長できるのではないのでしょうか。総合調査は終わってもこの貴重な財産を、子どもたちにしっかり伝えてもらいたいと思います。

カリカリと土掘る鎌のその先に 歴史がヒョコッと顔を出す



波多山城跡について

市川 隆之

1. 山城とは

今から500年前、戦国時代を迎えた日本各地では戦乱に備えてさまざまな施設が作られた。山城もそうした施設の一つで、敵軍勢の監視や戦闘時の逃げ込みのために里山の山頂に兵の駐留や敵を迎え撃つ平場（曲輪）をつくり、堀や人工の急斜面（切岸）などで守りを固めていた。この山城は日本各地で造られ、波田町にも若澤寺の近くの山頂に波多山城跡という山城がある。

波多山城跡の石積を江戸時代に若澤寺の造成に使ったとの言い伝えがある（註1）。戦国時代の山城は土を切り盛りして石垣を使わないものが多く、波多山城自体も大きく壊されていないようで事実関係はよくわからないが、若澤寺に近い場所にあつて、その関連が気になる場所である。そこで、波多山城跡について地表面に残されている痕跡を測量して記録する調査を行うこととなった。山城は戦争方法や社会状況によって姿を変えるとされ、その形は当時のようすを伝える歴史資料の一つといえる。

2. 波多山城跡の特徴

波多山城跡は若澤寺跡脇を流れる水沢を挟んだ反対側の尾根上にあつて、若澤寺から徒歩15分くらいで登れる。現在は山林となつて麓からは城の存在はわからないが、山頂の城跡は比較的残りも良く、堀や土塁を巡らせた平場などの痕跡が明瞭に残っている。



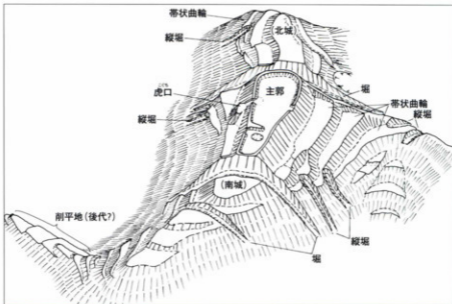
山麓から見た波多山城跡



北城から見た主郭



主郭のようす



第16図 南からみた波多山城跡



南城先の堀跡



主郭北側の堀跡

山城は尾根上の小高いところに主郭と呼ばれる中心的な平場を置き、その尾根続き両側を堀で区切って南城・北城と呼ばれる平場（曲輪）が続く。唯一背後の山に続く東側尾根は、一般的には堀で遮断されるべきところだが、ここには大きな堀は認められない。各曲輪の両側斜面には帯状の曲輪が連続し、南城先端付近の斜面やその先の尾根上にもさらに幅の狭い平場が続く。ただし、南城先端の狭い平場は後述するように後代につくられた林業関係施設かもしれない。次に山城の各曲輪ごとにみてみよう。



虎口のようなす（矢印先が主郭）

3. 主郭と周辺の曲輪

主郭は山城の中心で、重要な施設が置かれ、敵に攻められたときは最後に籠る場所でもあった。波多山城跡の主郭は中央の高いところにあり、幅約15m×長さ約45mの細長い楕円形をして周囲を土塁で囲んで守りも厳重だ。内側は広く平坦ながら、中央南側よりが土塁で仕切られ、南側には井戸跡とされる大きな窪みがある。主郭周囲の土塁は3ヶ所切れているが、北西部分は直下の小平場で折れて下の郭へ坂道が続くもので、側面から敵を迎え撃つように造られた入口＝虎口とみられる。他は斜面下に何も施設がなく、下の郭とのつながりもわかりにくいため当時のものか不明である。特に東側は現在奉られている秋葉社への祠の参道の疑いがある。

この主郭の北・南の両端は深い堀で切れ、側面の東斜面に幅4～7m前後の帯状の曲輪4段、西側に3段（上段は虎口を挟んで2ヶ所）続く。また、西側北西部、東側北東部、南東部の堀脇の帯状曲輪下段付近に敵の横移動を防ぐ斜面方向の縦堀と思われる溝が2本前後ある。

4. 北城

北城は堀を隔てて主郭の北側に続く郭で、幅12m、長さ40mほどの不整形な楕円形をしている。その東縁は僅かに高く、かつて土塁があったとも考え

られるが、他は判然としなない。ここも主郭同様に側面や北の尾根先端部分に帯状や幅の狭い曲輪が付設されている。下方の帯状曲輪は幅が狭く、縦堀と思われる溝を横断したり、掘り壊していることから後代の林業関連施設か、道跡かもしれない。

5. 南城

南城は主郭南側につづく平坦地で、つくりは比較的あっさりしている。平場が狭い上に側面の平場も主郭・北城に比べて少なく、範囲も不明瞭である。南城先端は浅い堀がもう1条あり、その先は不明瞭な平坦地状に続き、そこから北西側の枝尾根上に続く斜面に狭い平場、枝尾根上に広い平場が続く。これらの平場は斜面に散在していたり、段差の比高差が小さかったり、一部は堀を横断するように造られていることから、山城施設ではなく、後代に造られた山仕事などの施設の疑いもある。

6. 全体の構成

波多山城跡は尾根上に南城・主郭・北城と広い平場が並ぶことから、監視や狼煙専用ではなく、一定の人数が籠る城として造られたと考えられる。攻めて来る敵に対しては、尾根上の堀で主郭へ直接登れないようにし、側面斜面に回りこむ敵は帯状平場で迎え撃つ構造とする。斜面の曲輪は、南城では造りが簡素ながら、北城が明瞭で数も多いこと、主郭東側の斜面にも帯状曲輪が続くことから、山麓の北側及び若澤寺側の沢から敵が侵入してくることを想定しているとみられる。このルートが即ち、城へ登る道があった方向なのだろう。

7. 波多山城跡の造られた時期

城は戦争の仕方や用いられる武器の変化に従って改造されるので、こうした変化に対応する防御施設は城の時期を示す指標と考えられている。そこで、波多山城跡の防御施設について簡単に整理してみよう。波多山城跡は数段続く帯状の曲輪があること、主郭周囲が土塁で囲まれること、主郭側面に折れをもつ虎口、堀の脇斜面に敵の横移動を防ぐ縦堀と思われる堀が特徴的に認められる。

ところで、三島正之氏の松本平の山城研究（註2）によると、武田氏侵入以

前の小笠原氏時代（以下に前期小笠原氏時代と呼ぶ）の城は小さな平坦地（削平地群）を重ねる特徴（代表例—松本市林大城）があり、武田氏の城は側面に横堀と縦堀を入れる特徴（代表例—朝日村武居城）、小笠原貞慶の時代（以下に後期小笠原氏時代と呼ぶ）のものは何重もの堀や石垣や樹形虎口などを備える特徴（代表例—松本市桐原城）があるという。この研究を参考に波多山城の時期を考えてみよう。

まず、削平地群は帯状の曲輪と呼んだものにあたるが、南城付近は怪しいながら、主郭側面や北城では土塁が付くものもあって城の施設と認められる。一方、横堀と放射状の縦堀は認められないので武田氏の城とはいえず、さらに背後を切る何重もの堀や樹形虎口・石垣がない点では戦国時代末期の後期小笠原氏のものとも言えない。こうしてみると、波多山城は武田氏侵入以前に造られた可能性が高いということになる。

ただ、三島氏の研究以外に山城研究が進んでおらず、断定には不安がある。三島氏も武田氏系山城は勝頼時代のものとして推測しており、信玄時代のものは余り触れていない。波多山城跡のような尾根両端を堀で切り、主郭側面に虎口をもつ例は他地域にもあり、より広域を支配した勢力との関連は気になる。さらに、後期小笠原氏の特徴を備えた城は松本市東部から安曇野市東側山地に偏って、それ以外の場所ではよくわかっていないところがある。

また、波多山城跡自体も古い要素とされる削平地群と、新しい要素とみられる折れをもつ虎口や堅堀を備える矛盾点がある。改築された可能性は高いが、新しい要素が部分的に留まる点も不明で、古い要素とされる削平地群が尾根上に連続する林大城と斜面側面に広がる波多山城を同じように考えてよいかは不安もある。

ところで、波田町誌によると波田町ゆかりの戦国時代前後の武士は、15世紀前半頃まで源姓を名乗る波田氏、中頃に梓川対岸から進出してきた西牧氏（仁科氏）、さらに15世紀末頃に小笠原氏が西牧氏攻撃後に入った小笠原氏配下の櫛置氏系統の波田氏等が挙げられ、武田氏時代は西牧氏関係の古畑氏、武田氏滅亡後は郷土として百瀬氏の名が挙げられている。また、武田信玄侵攻直後に中塔城に籠った小笠原氏に対して三村氏が配置されたとする後代の古文書もあるという。波田町誌の推測から源姓を名乗る波田氏が勢力を弱めてきたところに西牧氏が入ったとすれば、源姓の波田氏ではなく、西牧氏（仁科氏）か、櫛置氏系波田氏によって山城が造られた可能性が浮かぶ。

ただし、現時点では西牧氏や小笠原氏の城の仔細な特徴が明らかにされておらず、直接比較することは難しい。西牧氏本拠周辺の梓川対岸には波多山城跡と類似規模の田屋城、北条城跡があり、何れも主郭両側を堀で遮断する点は波多山城跡も似ているが、側面よりも尾根上に狭い平場が連続する姿はやや異なる。また、前期小笠原氏関係の林大城跡は、主郭側面よりも尾根先端側に狭い平場が続く点、虎口は尾根上にある点も異なる。地形や似た地形から似た姿になった可能性もあって誰が造った城かを断定するには今少し研究が必要だ。

8. 若澤寺との関係

最後に若澤寺との関連を考えてみよう。これまで推測したように、波多山城跡が地元の武士によって北側山麓からの敵に備えて造られているとすれば、若澤寺とは直接関連がないということになる。ただ、城への登り口の一つが若澤寺側の沢沿いにも想定でき、何よりも近接している点は全く関連がないとも言にくい。その辺の事情をどう考えるかは現時点では分からないが、少なくとも主要登城道が北側山麓からとすれば、若澤寺に直接的な軍事力や戦闘への協力を期待していないことにはなろう。また、宗教的な防御の意味や戦闘員以外の人々を寺に非難させることを期待して若澤寺に近接して造られた可能性も考えられなくはないが、それを断定するには材料が少ない。

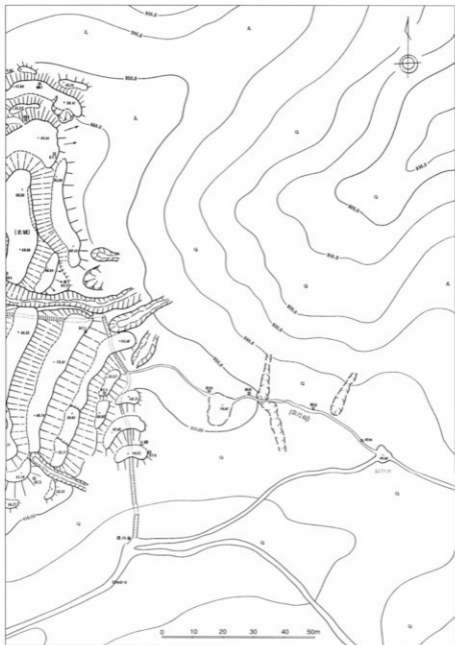
何れにしろ、波多山城跡については今回の報告でも解明できないところが多く残される。今後、波多山城跡周辺の調査や周辺の山城の比較研究が進むなかで、新たに判明することがでてくることを期待したい。

参考文献

- 註1 長野県町村誌刊行会 1946「長野県町村誌南信篇」
 註2 三島 正之 1996「筑摩・安曇郡の山城」
 「信濃」48 - 10



第17図 波多山城跡の縄張図





若澤寺跡の保護活動

波田町教育委員会

若澤寺跡では今回の総合調査が行われるまで、現地の整備は所有者の方々により毎年行われていました。中堂救世殿面や歩道など、若澤寺の根幹をなす箇所を整備を中心に行われていました。一方で、方丈・護摩堂面はうっそうとした灌木に覆われたままになっており、そこにあった礎石や遺物は、今回の総合調査まで誰にも知られることなく残ってありました。

この総合調査によって、現地の発掘調査により今まで知られていなかった方丈・護摩堂面の礎石や遺物の発見など、新しい発見がたくさんありました。今でも若澤寺の礎石が顔を出しており、当時の遺構をはっきりと今に残しております。

この調査が行われている間は、現地での発見が発端となり、町内外からの若澤寺に対する注目が大変高まっておりました。平成18年3月には、第一線で若澤寺総合調査に携わっておられる先生方をお迎えして、「若澤寺シンポジウム2006」を開催しました。町内をはじめとして町外からも大変多くの方が訪れ、にぎわいをみせました。また、地元の中中学生をはじめとして、若澤寺跡の見学にも多くの方が訪れており、改めて若澤寺が注目されている状況です。



若澤寺シンポジウム2006 (H18.3.4)

今後しばらくの間は、現地での発掘作業はお休みとなります。

発掘調査に比べ、史跡を周る遊歩道等は足場の悪い箇所も多く、十分整備されたとはいえない状況です。このため、いままでの現地で発掘等を行う「調査する若澤寺」から、現地の整備を行って後世に言い伝えて遺していく「伝える若澤寺」に変えていくことが重要になります。

歴史的、文化財的な成果はもちろん、本調査でもっとも大きな成果といえるのは、子どもから高齢の方まで町内外問わず、大勢の方が若澤寺というものに関わったことです。これからも地域の歴史・文化財として若澤寺が、知られ、愛され、守られていくことが、一番の成果であってほしいと願います。



地元中学生への現地説明会 (H18.6.15)

▶ Column 7

若澤寺現地調査を振り返って

小林 紀美子

平成11年から始まった総合調査に、私が参加したのは昨年と今年のわずか2年間でしたが、規模、状況、学術的な価値からも貴重な遺跡の発掘に関わることができ、とても有意義な体験をすることができました。

私が参加してできたことといえば、まず下草刈り、刈り取った大量の草の片付け、発掘する箇所草取り、そして発掘作業、最後は発掘した箇所の埋め戻し作業等でした。発掘作業まではひたすら草を集めたり、黙々と草刈をしたりと、地道な作業がほとんどでしたが、木立の中に注ぐやわらかい陽の光、疲れた体にやさしい心地よい風、何回も深呼吸したくなるような森の香り、マイナスイオンたっぷりの特上のおいしい空気、とても気持ちのよい汗をかくことができました。

また、お昼にはみなさんが持ち寄った季節の野菜、山菜、きのこ等がたくさん入り、更にはうどん、すいとん等でボリュームたっぷりの鍋を作りました。いうまでもなく、私を含め皆さんが2杯、3杯とおかわりをしていました。

残念ながら、発掘時の遺物を見つけるといった感動や興奮を味わうことはできませんでしたが、現地でもとても楽しくすごすことができました。

これも、初期の頃からご苦労していただいた職員、関係者のみなさんが段取りよく進めていただいたおかげです。

これまでの成果を機に、上波田の石畳から田村堂を経て若澤寺跡、いずれは元寺場遺跡までの山道が波田町の「歴史の散歩道」となるよう整備、管理していただき、「仁王尊の殿めぐり」のお祭り等も活用して、広く町内外のみなさんにも知ってほしいと思います。



元寺場遺跡と若澤寺

—信濃の寺院史にどのように位置づけられるか—

牛山 佳幸

平成11年度から継続されてきた元寺場遺跡および旧若澤寺境内の発掘調査は、本年度を以て一応終結することとなったが、この間に多くの新知見をもたらす成果が得られたことは、形式的ではあるが調査指導者の一員に名前を連ねた者として誠に喜ばしく思う。筆者は歴史学（日本宗教史）を専攻領域としており、調査過程で出土した遺物・遺構の取り扱いや、それらの歴史的意義をめぐる問題については不案内なため、こうした考古学的な所見に関しては、実際の発掘調査に当たられた方々の報告に委ねることとしたいのだが、今回の一連の調査結果は筆者自身の研究テーマの一つでもある、「地方寺院の成立事情と展開過程」という課題を考察する上でも多大な知見をもたらしてくれ、さらには信濃国内にかつて存在した類似の寺院の歴史的な性格を解明する上でも、大いに貢献しうるものであったことは確かである。小稿ではそうした点について若干の所感を述べてみたい。

地方寺院の成立事情に関する筆者の見方は、以前に伊那市教育委員会主催のシンポジウムで大まかな見通しを提示したことがある（拙稿「山岳仏教と密教系寺院の形態について」、伊那市・伊那市教育委員会編『伊那の中世伝説・山岳信仰』所収、2002年）。すなわち、一定の堂宇（伽藍）を備えた寺院が地方に建立され始めるのは七世紀後半頃からであるが、それらの多くは中央政府の奨励によって創建されたもので、一般に郡や郷の官衙（役所）に隣接しており、いわば平地寺院と言ってよい。それに対して、平安時代に入ると民間の修行者たちの活動が活発となり、原始宗教であるシャーマニズムやアニミズムに由来する山の神への信仰と仏教とが結びついたり、さらには新たに中国からもたらされた密教の影響などもあって、寺院は山中に建立されるのが一般的となる。従来、ややもするとこうした山中の寺院をすべて「山岳寺院」と呼んだり、最初から修験道場であるかのように論じられることが多かったのだが、こうした理解は必ずしも正鵠を射たものではなく、少なくとも霊山系寺院と里山系寺院の二つに大別すべきであることを筆者は提唱した。

もっとも、この点に関しては、すでに考古学者の齋藤忠氏が、山中に立地していても修験道とは直接結びつかないようなタイプの寺院を「山林寺院」と規定されており、この分類法は今日も有効性を失ってはいないと思われるのだが、筆者が「山林」という語を使わず、あえて里山系寺院と呼びたいのは次のような理由からである。第一に、奈良時代から平安初期にかけてのいわゆる律令制下には、当時の官寺の僧尼らが經典を読誦する必要上から、一定期間静寂な山中で暗記力増強を目的に「山林修行」と呼ばれた修法（虚空藏求聞持法など）が行われており、「山林」寺院という表現を用いることで、こうした修行の拠点の寺院であるかのような理解がなされるのを避けるためである。第二に、山中に建立された寺院は後に修験者の集まるような霊山でなくとも、多かれ少なかれ前述したような山に対する素朴な信仰と全く無縁ではないと考えられるが、「山林寺院」という用語はそうした面がやや捨象されがちな印象を与えるためである。さらに第三点として、山を仰ぎ見ることのできる村里に居住した人々の日常的な生活と不可分の、いわば地域信仰圏を有していた寺院という意味を含む用語としては、「里山」を冠した方がよりふさわしいと思われるからである。

前置が長くなったが、若澤寺は筆者の分類法でいう、こうした里山系寺院の代表的な存在と言ってよいのである。里山系寺院は文献史料上に見える「山寺」にはほぼ該当すると考えられるが、全国的に見るとそれらは奈良時代末頃から畿内近国を中心に登場し始め、平安時代には地方にも成立するに至ったことが知られる。ところで、里山系寺院＝山寺、とりわけ地方に所在したものの中には、ある時期から山を下り始め、山麓の村里に再興されたことが推察される事例が多く存在する。現在各地の山中に残る「堂平」「坊平」「寺平」「寺所」「堂所」といった地名は、そうした里山系寺院が当初立地していた場所であるとの伝承を伴っていることが多く、たまたま一部の堂宇が旧地に残存している場合には、それが「奥の院」として機能している例も散見される。長野県内に現存している事例で（無住も含む）、こうした背後の山中から移転したとの伝承を有している里山系寺院としては、管見の範囲だけでも次のようなものが挙げられる。

〈南信〉薬王寺（辰野町北大出）、日輪寺（箕輪町南小河内）、仲仙寺（伊那市羽広）、光前寺（駒ヶ根市赤穂）、瑠璃寺（高森町大島）

〈中信〉牛伏寺（松本市北内田）、神宮寺（松本市浅間温泉）、保福寺（松本

市中山)、光輪寺(朝日村西洗馬)、安養寺(筑北村松場)、福満寺(麻績村山寺)、池口寺(大桑村殿村)、盛蓮寺(大町市社)

(北信) 高山寺(小川村稲丘)、清水寺(長野市松代町西条)、智識寺(千曲市上山田)

(東信) 実相院(上田市真田町傍陽)、滝仙寺(青木村奈良本)、釈尊寺(小諸市大久保)、真楽寺(御代田町塩野)、安養寺(佐久市安原)、明泉寺(佐久市香坂)、長命寺(佐久市大沢)、明光寺(佐久穂町上)、千手院(佐久穂町平林)

いずれも旧地の場所にそれを示唆する地名が残されているが、とくに「堂平(もしくは堂ヶ平)」の地名が多いのが特徴で、薬王寺・仲仙寺・光前寺・牛伏寺など十ヶ寺以上に及ぶ。若澤寺については付近に「堂平」の地名こそないものの、「元寺場」の地字名はまさにこうした「堂平」に該当するものと言ってよく、今回一連の調査が行われた元寺場遺跡が若澤寺のかつての所在地であった可能性が高いことは、この点からも推測されるのである。また、なかには二度以上の移転を経て、最終的に村里に下りてきたとの伝承を持つものもあり、牛伏寺が鉢伏山中腹の「蓬平」から裏山の「堂平」を経て、さらに現在地に定着したというのはそうした例である。実は、若澤寺の場合も、元寺場とは白山頂を挟んだ反対側の尾根に「大堂ヶ原」という地名があって、見方によってはここが創建時の寺地であったことも考えられないわけではなく、そうなると、今日も寺跡の残る水沢地籍に落ち着くまでに二度も移転したことになるだろう。

いずれにしても、上に掲げた長野県内の里山系寺院の大部分は創建が平安期頃まで遡りうるものと推定される点からして、当時の顕密系(旧仏教系)寺院は、山中に建立されるのが一般的であったことがあらためて示唆されるわけであるが、移転に関しては口承によるか、もしくは後世の縁起類に記されるだけで、典拠となる同時代の確実な文献史料があるわけではなく、また考古学的な遺構調査もほとんど行われていなかったために、伝承の域をでるものではないとする見方も根強かった。わずかに信憑性のある事例としては、旧地「坊平」の地表面に礎石が残された筑北村松場の安養寺と、旧地と推定される山寺遺跡(ただし、大峯山頂に「堂平」の地字が残るので、当地は二度目の寺地と考えられる)の発掘調査が近年なされた大町市社曾根原の盛蓮寺の二ヶ寺に過ぎなかったのだが、元寺場遺跡に堂宇が存在していたことが

確実になったことで、若澤寺は県内では上記の盛蓮寺に次いで、新たに移転伝承がほぼ事実を反映したものであったことが立証された例と言えるのである。

それでは山中から里に下りた理由や背景は何か。また、その時期はいつ頃のことか。前者について筆者は、檀那でもあった在地領主層の葬送儀礼に関わるようになったことが一因ではないかと想定している。というのも、祈願や祈禱のみなら山中に位置していてもさほど問題はないが、死者に対する仏事や法要を営むとなると、関係者とりわけ遠方からの男女老若を含む参列者のことを考慮する必要があり、さらにその後の日常的な墓参の便を考えれば、奥深い山中に立地していると何かと不都合が生じるからである。そのようにみると、時期的には鎌倉時代以降、多くは室町時代から戦国時代頃ではなかったかとの推定が可能だろう。我が国では古代には「死」は穢れと認識されていたために、当初は寺院が葬儀を取り仕切るとはなかったが、仏教信仰の浸透によって貴族社会では平安時代の後半から次第に葬送に関与することが始まり、鎌倉期に入るとその風潮は地方の武士層の間にも広まった。いわゆる菩提寺の出現であるが、その点をうかがわせる手がかりとなるのが寺院境内から発見されることの多い骨壺の存在である。上に掲げた里山系寺院でその好例となるのは、辰野町の薬王寺と大町市の盛蓮寺の場合であろう。

すなわち、前者の薬王寺では現在の寺地の背後に位置する畑から鎌倉時代の古瀬戸灰釉四耳壺が出土したが、これは当時の一般農民が入手できない高級品である点や、収納されていた人骨が女性のものであるとの鑑定結果が出された点から、火葬にされた女性は檀那である領主層の一族の者ではないかと考えられている。後者の盛蓮寺については、旧地とされる前記の山寺遺跡から、やはり鎌倉中期頃の作製にかかる古瀬戸灰釉の四耳壺一点と瓶子二点が、青白磁製の水注などとともに出土し、檀那である仁科氏関係者の墓地が寺内に営まれていたのではないかとの見方が提起されている。したがって、前者は山から下りた後に菩提寺としての役割を果たしていたことを示す例であり、後者は里山に立地していた時点で既に菩提寺的な機能を有していた例とみることができるだろう。

そこで若澤寺の場合だが、元寺場遺跡からも上記の例と同様の古瀬戸灰釉四耳壺と同じく瓶子が各一点出土したのである。県内の二ヶ寺の遺跡から同時代製の、それもよく似た形状の四耳壺と瓶子がセットで出土した事実は、

当時の葬送儀礼の執行方法に共通性のあったことを示唆する点で興味深いことと言わねばならない。この他にも元寺場遺跡からは、底に「安養」と読める墨書のある灰釉陶器片が出土して注目されているが、「安養」とは極楽浄土を意味する仏教語で、こうした調度品が奉納されて使用されていたことも、死者の往生を願う供養が恒常的に行われる寺院であったことを推測させる根拠となるだろう。いずれにしても、祈禱寺院あるいは祈願寺院としての性格の強かった顕密系の地方寺院が、鎌倉時代以降は檀那たる在地領主層の菩提寺として期待されるようになっていた事実を示していると考えられる。

そして、そうした役割が一層強まってくる室町時代の後半、とりわけ各地で戦乱が続いた戦国時代頃が、全国的に見て里山系寺院＝山寺が山麓や里に移転してくるピークであったと推考されるのである。若澤寺も下山して再興された時期がこの頃と思われるのは、末寺西光寺の遺品とされている元亨二年（1322）銘のある金剛力士像を別にすると、梵鐘（永享11年＝1439）や鰐口（宝徳2年＝1450）の鑄造、あるいは種字阿彌陀三尊板碑（長祿2年＝1458）など参道周辺に残る石造遺物の造立が、いずれも十五世紀中頃の時期に集中している事実、さらにその点に符合するかのよう、元寺場遺跡が江戸時代以降は使用された形跡がないのに対して、若澤寺跡から出土した遺構・遺物が戦国期以降のものであることが今回の一連の調査で確認されたからである（補注）。ただし、戦国期には禅宗の臨濟宗（とくに妙心寺派）や曹洞宗、あるいは念仏系の浄土真宗・浄土宗などが、葬送儀礼の執行を布教手段の一つにしながら教線を全国的に拡張し始めて、近世初頭に江戸幕府による寺請制度が確立する頃には、一般農民を主たる対象とした葬儀を担うのは主としてこれらの宗派に属する寺院となっており、その一方で、従来の顕密系寺院の多くは村落内では再び祈願寺院としての役割だけに後退したことが知られるのだが、それらの寺院もたとえ中世の一時期とは言え、菩提寺的機能を志向したという事実が推測されることは重要だろう。

今後の課題に属することだが、里山系寺院については檀那の変遷とそれに伴う所領の規模や所在地、さらに中央寺院との本末関係や、それを機軸とした相互の人的交流や文化的影響といった点の解明をさらに進める必要がある。檀那に関しては、若澤寺はおそらくは大野牧の現地管理者であった豪族の創建にかかり、平安後期以降は現在の松本盆地一帯に進出した清和源氏のうち、村上氏系の波多氏がそれに替わったとみられる。前述した永享11年（1439）

に铸造された梵鐘の寄進者の「源信盛」はこの波多氏と考えられるから、元寺場から移転させて山麓に若澤寺を再興するのに直接関わったのは、同氏である可能性が高いだろう。ついで、その11年後の宝徳2年（1450）には「讚岐守信兼」なるものが鰐口を寄進しているが、これを隣接した安曇郡西牧郷を本拠とした西牧氏とみて、この時期に同氏が府中小笠原氏の内紛に乗じて波多郷に進出してきたとみるのが通説である。ところが、さらに八年後の長禄2年（1458）には、「平朝臣六翁」なる者によって前述した阿弥陀三尊板碑や新たな鰐口が奉納されるに至るが、西牧氏は遊野姓であることから、この人物を西牧氏の一族とみることはできない。この「平」氏がいかなる武士であったかを明らかにするとともに、以上のような十五世紀中頃の短期間に波多郷の領主層、すなわち若澤寺の檀那層が矢継ぎ早に入れ替わるに至った在地状況をさぐる事が、当寺の移転をめぐる政治的背景を考える際の重要な手掛かりになるように思われる。なお、上記の「平」氏が退転して以後は小笠原氏の帰依を受け、ついで甲斐武田氏の安筑侵攻後はその祈願寺として保護を受けていた事実は、既刊の「若澤寺を探るⅡ若澤寺跡～若澤寺跡調査報告書～」に寄せた拙稿で指摘したところである。

もう一つ特記しておきたいのは、今後さらに若澤寺跡周辺の考古学的な調査が行われる機会があるとすれば、菩提寺であったことの徴証となる五輪塔や法篋印塔などの墓石や経塚遺構の発見が期待されることである。とりわけ後者の経塚は必ずしも寺院の存在と関わるわけではないが、全国的に見ると里山系寺院＝山寺の近辺には経塚遺構が見つかることが多い。上記の長野県内の事例では、伊那市羽広の仲仙寺がその例で、遺跡そのものは未発見だが、旧地とされる「神護平」のある背後の山が、まさに経ヶ岳と呼ばれており、『仲仙寺縁起』にも埋経を示唆する伝承が記されていることから、その点が推察されるのである。また、明治初年の廃仏棄釈により廃寺となったため、上には掲げなかったが、松本市入山辺桐原にかつて存在した里山系寺院の海岸寺の場合は、その旧地とされる「弘法平」の周辺から平安後期の経塚遺構が出土している。経塚信仰がとりわけ流行したのは平安時代後期から鎌倉初期にかけての時期と、室町時代から戦国期にかけての時期であったことが知られるが、長野県内からは平安期の経塚遺跡が弘法平経塚のほかにも、長谷寺経塚（長野市篠ノ井）・北日名経塚（坂城町）・下牧経塚（伊那市西春近）など、これまでに合わせて10ヶ所近くも発見されている。一方、後者の

戦国期には、若澤寺にも諸国を遍歴した「経聖」が盛んに訪れたことが、天正2年(1574)から同3年にかけて建立された3基の供養碑の銘文から明らかであり、この地が古くからの経塚信仰の拠点であったことをうかがわせる。おそらく、元寺場地籍に伽藍が立地していた平安期にも、白山とその周辺がそうした埋経の地と認識されていた可能性は高いのではないかとと思われる。

総括すれば、若澤寺は県内に残る同類の里山系寺院に比べると、文献史料や石造遺物に比較的恵まれていたことが幸いし、それらの史資料からこれまでもある程度推察されていた点が、今回の一連の調査で考古学的にも補強できたということが言えるだろう。それ故に、元寺場遺跡を含めた若澤寺関係遺跡群は今後、県内に多数みられる里山系寺院の性格を考察する際のモデルケースとなりうる事例であることは間違いなく、この点を強調して小稿の結びとしておきたい。

〈補注〉なお、平成16年8月に実施された方丈護摩堂跡の発掘調査で、平安期のものとみられる灰軸陶器片や鎌倉期の青磁香炉鉢片などが出土し、当初、若澤寺の伽藍は平安～室町期を通じて、元寺場地籍と山麓の二ヶ所に併存していたのではないかとの見方も一部で出されている。筆者は、元寺場の伽藍で使用されていた仏器や食器が、下山後も使用され、その後破損したために一括して廃棄された可能性が高いとみているが、この問題については今後の検討課題となろう。



若澤寺の前身と伝えられる元寺場跡

若澤寺現地調査を振り返って

中嶋 平次郎

平成14年より若澤寺での本調査が始まり、まず驚いたことがあった。それまでも遺跡周辺の下草刈りをしてきたが、うっそうとした草木が生い茂った護摩堂・方丈跡から、多数の巨大な堂の礎石が姿をあらわしたのだ。私は若澤寺跡の地権者の一人であり、若澤寺のお膝元ともいえる上波田に住むものであるがそういった関係があるないに関わらず、本調査への期待を強く抱いた。

今回の調査は、現場での成果はもとより、総合的な調査により多方面において成果が顕著である。特に私が印象に残っていることを2つ書きたいと思う。

1つ目は、文献資料の調査によって、現在町でもっとも大きな行事といえる「仁王尊股くぐり祭」に関する記述が発見されたことである（文献資料参照）。仁王尊の股をくぐると、「はしか」などの病が軽く治る、という伝承のみで行われていた行事であったが、この考証が得られたことは、祭りそのものの意義を高めたとともに、先人たちの信仰心、子どもへの想いの強さを再認識させられるものであった（文献資料参照）。

2つ目は、紛失してしまい二度と見るができな
いだろうと思われた、「若澤寺一山之略絵図」の版木
との再会であろう。私はこの版木が、若澤寺と縁のあ
った水沢氏の下にあると知り、現在は県外に在住する水沢健一郎氏（私の同級生）
に対し、数回にわたり手紙を書いた。結果、数十年ぶりに波田町を訪れ、持参し
た版木と対面することができた。即座に川澄写真店にて写真撮影をした（写真参
照）。中央公民館にて、話を聞くことができた。版木の状態は残念ながらよくは
なかったが、今後も折衝し、いずれは大勢の方々に見ていただけるようになれば
と切望するしだいである。

現在上波田地区では、その歴史的背景、景観を生かした町並み環境整備事業が行われている。先ほどもふれた「仁王尊股くぐり祭」には毎年2日間で約3,000人の方々を訪れている。若澤寺へは地元の子どもらが遠足で、また町内外を問わず多くの方が訪ねてくる。明治の廃仏毀釈があったとはいえ、若澤寺の威光は、現在でも衰えることなく輝いている。そして今回の調査によって、一層輝きを増したといえる。これからも若澤寺を大切に守り、675年の歴史ある仁王尊股くぐり祭を活かしていくことは私たちの命題であり使命である。



水沢健一郎所蔵若澤寺版木・同級生中嶋平次郎

水沢の地形

波多腰 忠行

1 はじめに

水沢は、1950年代までは「みっさわ」と呼ばれていた。白山一帯は「みっさわ山」であり、天保年間に著された信濃奇勝録にも「水沢」とふりがながされている。

この水沢は、白山付近を源として上海渡、稲荷社の沢口までの約25kmを流下するかなりの勾配を持つ沢である。また、天水の受容面積に比べて水量が豊かで、季節による変化も少ない。夏季の水温は13℃位で、飲料水として水質が優れている。

2 水沢の地質

松本盆地の西方山地の基盤は、今より1億年から2億年位前に海中に砂や泥、生物の遺骸などが堆積してできた砂岩、泥岩、チャートなどの硬い古期岩類で構成されている。このうち水沢は砂岩層が大部分を占め、一部に泥岩層が見られる。

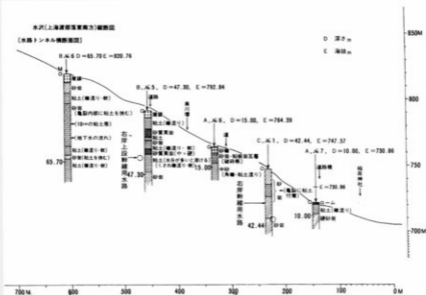
砂岩は硬くて風化に耐久性があり、その上加工しやすいため、古くから石材として利用されている。元寺場の礎石、若澤寺の石積み、礎石、石段、石碑、墓石それに丁石など、ほとんどの石造物の石材は砂岩である。また、これらの石材は現地にて調達されたものと思われる。

3 敷地の造成

硬い地盤の山地に、どのようにして寺院の敷地が造成されたのかを知る手がかりの資料が、波田町誌自然民俗編（1984）第1章にある。

1970年代梓川への3つのダム建設に伴い、中信平農業水利事業が企画され、右岸幹線トンネル掘削のボーリング調査が水沢筋の6ヶ所で行われた。その結果からこの地点の地下構造が明らかになった（右図参照）。そのうちBNo 5は標高790m（若澤寺丁石10丁目）BNo 6は標高820m（若澤寺丁石13丁目）の2地点は右図に示すような柱状図に表されている。

この記載には「沢沿いのためローム層や表土はほとんど残っていない。崖すい層か、または古期岩類の岩盤があり、岩石の種類は砂岩、泥岩である。しかし節理（岩石に入る一定方向の割れ目）が多く、断層粘土の部分が目立ち、破砕帯の性状が強い。砂岩中に断層粘土が入り込んでいることが多く、地下水脈も豊富である。このことから、水沢に沿う南北方向の相当規模の大きい断層の通過が予想される。松本盆地形成に関係した断層であろう」と記されている。



寺域は硬い地盤が断層の通過で破砕され、さらに長い時間の経過で風化された山地に造成されている。脆弱な山地を切り崩して移動し、平地を造成することは労力と時間の軽減に大変有効であった。また沢筋にある石の素材を使い、平地の端を石積みでしっかり固め、礎石を設け伽藍の造成をすすめたものと思われる。

4 若澤寺に思う

若澤寺のような大伽藍の造成のために必要な、いくつもの条件を満たした地が水沢であった。江戸末期この地を訪れ学んだ僧、旅人が多かったという。その人々が若澤寺(波田)の文化を信州をはじめ広く関東・中部圏に伝えたものと思う。水沢を開き、文字通りの礎を築いた見識豊かな先人がこの地におられたことを想い、発掘調査に携わることができたことを幸せに思う。

参考文献

波田町教育委員会 1984『波田町誌(自然民俗編)』



若澤寺の総合調査を終えて

原 明芳

平成11年度から8年間にわたって国庫補助を受けて実施してきた若澤寺総合調査が、本年度をもって終了する。現在までに2冊の報告書を刊行してきたが、今回最後の報告となるので8年間の調査の成果と課題についてふれておきたい。

① 調査成果

遺構が確認あるいは想定される場所は、白山（頂上）、元寺場、若澤寺跡、上波田神社付近の4ヶ所である。それぞれが独立して存在しているようにみえるが、実は深く関わり合っていたことがわかった。それぞれの場所の、発掘調査や記録等から現在までにわかった時期は、第17図のとおりである。ただし空白とした時期にも建物があり、活発ではないが宗教活動が行われた可能性は残している。それぞれの場所についてふれてみたい。

元寺場跡

以前から大きな伽藍が存在していた可能性が指摘されており、実際に大きな建物の礎石等が存在していたことが知られていた。今回の調査によってまず正確な測量が行われ、現状をしっかりと把握することができた。その詳しい規模等については報告書を参照していただくが、確実に若澤寺跡よりも広い。時期的にはすでに平安時代（9世紀末から10世紀代）には「安養□」の墨書や多量の灯明皿にみられるように、多くの人々の信仰空間となっていたことは間違いない。それから若干の空白を於いて13世紀中頃には、古瀬戸蔵骨器の発見により墓地として利用されたことがわかる。その後15世紀中頃になり再び多くの人々がこの場所を利用し始める。大きな伽藍の造成はこの時期であった可能性が高い。その造成の特徴は、中央に白山に向かう道を残していることであり、白山信仰の導入と共に整備されたと考えられる。なお、遺物は16世紀中頃にはなくなってしまうことから、その時期には多くの人々の定住はみられなくなる。しかし、寛文10年（1670）の寛文山論の「黒川山論裁許図」に、「若澤寺」と思われる建物が二棟描かれているほか、元寺場と考え

られる場所に大きな堂らしき建物が描かれている。また元文3年(1738)の什物帳には「峯白山権現堂 十一面観音」と言う記載がある。しかし安永7年(1778)の什物帳には「峯白山権現堂」はなく、若澤寺の金堂の中に「十一面観音」が安置されている。また、「若澤寺参道の図」をみると、白山と若澤寺の間の位置に「白山本地堂」という記載があり、その図には仁王門の位置が現在の位置に描かれていることから、西光寺が廃寺となった18世紀初頭以降ということになる。このようにみると、以前から基壇及び礎石が残っておりその存在は知られていたが、今回の調査によって規模等が確認された5間×5間の大きな建物は、江戸時代には「峯白山権現堂」「白山本地堂」と呼ばれた建物であることは間違いなく、18世紀のはじめまでは存在したのであろう。

なお、白山信仰の象徴ともいえる「十一面観音」は江戸時代中期まで存在が確認できるが、明治維新の廃仏毀釈の時期には所在不明となっている。

若澤寺跡

石垣を残す大きな伽藍跡が残り、「信濃日光」と呼ばれた往時を偲ばせるのには十分である。

まず今回の発掘調査で平安時代の灰釉陶器が発見されたことは、この場所で平安時代から人々の生活が営まれたことを示している。ただ遺物の量も少なく、それがどのような内容であったかは不明である。しかし元寺場で人々の信仰活動が行われている時期であり、そこへの道筋にもあたるので十分に関連が考えられる。

さて、その後は16世紀中頃まで活発な活動の痕跡は、出土遺物も少なく想定は難しい。そこで問題となるのは、於鳥羽の滝に向かう参道の途中にある長禄2年(1458)の「参道供養碑」である。15世紀中頃といえば、白山信仰の活発化により白山・元寺場と往来する人々も増えた時期である。この場所が上波田や山形村から白山に登る道が合流するところでもあり、その道筋に立てられた可能性もある。ただし、これをもって若澤寺跡に寺院が存在した根拠とはならない。

さて、調査の最終年度で遺構の存在は確認できなかったが、遺物からは16世紀中頃から17世紀中頃までの活発な活動が認められた。その時期の建物は、寛文10年(1670)の寛文山論に際する「黒川山論裁許図」に、「若澤寺」と思われる建物が描かれた二棟の建物であった可能性が強い。また若澤寺までの参道には丁石が寛永12年(1635)に立てられている。このほか、関連する十

王堂にあったとされる天正2年(1574)の「閻魔王の碑」(現仁王門裏)、天正3年(1575)の「若澤道供養碑」(現仁王門前)の存在など信仰が活発化した姿がみられる。

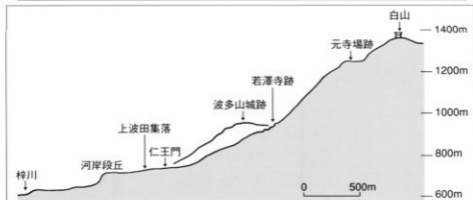
また、天正5年(1577)に武田勝頼から、天正10年(1582)に再び松本平を支配した小笠原貞慶など、時の領主からも安堵状が出されている。特に武田勝頼の安堵状には10ヶ所11貫150文を認める代わりに「観音堂並びに寺中造営」とあるように、この時期に伽藍の整備が行われた可能性を示している。牛山佳幸氏が指摘するように、田村堂もこの際に造られたのかもしれない。しかし、17世紀中頃を最後に再び遺物がみられなくなる。その時期には、護摩堂南・北A・北Bトレンチで確認された焼土層から、大規模な火災があった可能性が高く、記録を見ると延宝元年(1673)に火災の記事が見られ、遺物の時期と符合する。ただしその時代の面はトレンチの調査状況を見る限り、後世の大きな造成によって破壊されている可能性が高い。

その後の遺物は18世紀末まで認められない。しかしそのことが、若澤寺の建物が無かったということにはならない。なぜならば、17世紀後半から18世紀後半までの間に、御開帳(1717・1744・1773年)が行われたり、宝暦4年(1754)には信濃国内から僧を集めて初法談会を開くなど、宗教活動は記録を見る限り以前より活発化しているからである。この時期の宗教活動の中心がどこにあったのか、今回の調査でははっきりさせることができなかった。しかし、享保21年(1736)銘の裏参道の丁石があることから、この場所のどこかにそれがあった可能性が高い。

次に18世紀末から19世紀前半の遺物が多量に出土する。多くの記録にあるように、享和元年(1801)から観音堂の普請が始まり文化2年(1805)に棟上げ、法篋印塔ほふくしんとうの造塔など、現在に残る絵図に描かれたような「信濃日光」とまでいわれた伽藍ができてあがる時期であり、同6年(1809)の「水沢観音入仏御開帳」など、住職栄豊により活発な宗教活動が行われていた。護摩堂周辺からの多量の遺物は、十返舎一九に代表されるように数多くの参拝客が多く訪れた繁栄の様子を示している。遺構としては、護摩堂からその玄関にかけての礎石の残りが非常によく、若澤寺跡を活用していくための重要なポイントとなるであろう。

上波田神社付近

今回は発掘調査を行っていない。特に、参道の起点となる仁王門はもと西光寺の門で、現在は波田神社の南にあるが、最初は寺家町の裏の西光寺にあ



第17図 水沢の略年表と縦断面図

った。調査期間中に町の指定有形文化財となった「西光寺絵図」（原画は正保2年（1645）、寛政8年（1796）書写）によれば、中世以前は若澤寺をしのぐような大きな寺院であったとされる。仁王門の「木造金剛力士像」（元亨2年（1322））の存在からもかなり有力な寺院であった可能性がある。元禄末年（1700）頃に廃寺となり、現在その場所はリング畑・水田となっており、地表でその痕跡を確認することはできないが、地割り等からその存在は想定できる。今後もし調査が行われるとすれば、大きな成果が得られると思われる。

このような山頂から麓までを宗教空間として持ち、その起源が平安時代まで遡るような伝承をもつ寺院は、松本平にもいくつか存在する。しかし、そのことが実際に発掘調査等で確認されたのは初めてのケースであり、長野県の寺院研究に一石を投じると自負している。

発掘調査と平行して実施した文献調査では、新たにいくつかの資料の発見があり、従来のもも含めて2冊の資料集にまとめられて刊行した。そこでは、江戸時代に若澤寺の栄えた様子が多くの史料から再確認された。中でも、住職栄運によって記された宝暦4年（1754）の「慈眼山若澤寺初法談終始雜録」は、信濃国中から100人にわたる修行僧を集め30日間に渡って毎日儀式や修養、勉学が、ある日には寺中立錫に余地がないほど多くの参拝者も集めて行われ、その成功の裏には波田町ばかりではなく松本平の多くの人々の力があつたことを記している。また、もう一つ近年にぎわいを見せる子どもの健やかな成長を願って行われる「仁王尊の股ぐり」が、すでに100年以上も前から行われていたこともわかった。余談ではあるが、「若澤寺一山之略絵図」の版木が実在していたことも含め、さまざまな発見があつた。

② 調査を終了するにあたって

発掘調査を中心に、さまざまな調査を進めた上で一番の成果は、既に述べた新たな発見ではありません。なんと言っても地域のみなさんの若澤寺に対する関心、というより情熱の高まりだと思います。

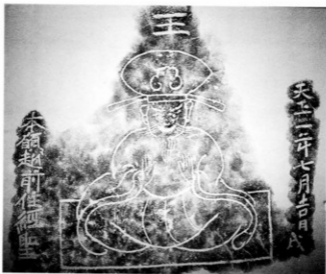
若澤寺は今から150年ほど前の廃仏毀釈とともに「信濃日光」ともいわれた壮大な伽藍を失い「若澤寺跡」になってしまい、寺ではなくなりました。それまでの若澤寺は、波田町の多くの人々とトラブルを起こしたこと

がありましたが、その時代ごとに大きな影響を与えてきたことは確かです。例えば今に残る重要文化財「田村堂」、その歴史を知るとは、波田町の歴史、文化等を正しく理解し、確かな未来を創りあげるために大切なことなのです。このように、若澤寺と言えば漠然と「大事なもの」「すごいもの」などと、多くの方が理解してくれていると思います。

調査がはじまり、新しい成果が続々と私たちの眼前に登場し、それを公開したり多くの方々に知らせをしたくて現地説明会や発掘調査報告会を開くと、多くの方が足を運んでくださるようになりました。さらにそのような会を重ねると、常連の方のほか、町内はもちろん遠方からも私たちの拙い説明に耳を傾けてくれる多くの方が増えてきました。ある時など会場や駐車場がいっぱいになってしまったことさえありました。また、夏の暑い中の発掘調査にボランティアで参加してくれたり、文献調査に協力してくれる方も増えてきました。町の中を歩いていて「調査を今年もやるんですか」「何かいい物が出ましたか」と、声をかけられることもあり、その情熱の高まりには正直言って驚きました。

文化財は法律で守られているから大丈夫、行政が保護をしていけばいいと思われる方もたくさんいると思います。もちろんそれは当然のことで、調査が続いている中で、仁王門の道を挟んで南側に地元の方々と町で立派な公園が造られました。きっと仁王門・田村堂を見学に来る方々をはじめ、若澤寺を見学しようとする方々にとって大いに役立つと思われます。しかし文化財を保護活用していくのは行政の使命ではありますが、所詮限界があるんです。多くの人々が汗をかいて寺跡の草刈りをしたり、調べて伝えていこうとする努力は、関わり方や度合いに違いがあったとしても、これこそが大事なことなのです。文化財はいくら価値が高くとも、そのような多くの情熱に支えられないとだめなんです。そんな姿を子どもたちが見ていたらどうでしょう。さらに、その子どもたちに若澤寺跡の歴史、その大切さを伝えたら、100人の子どもが100人とはいかないまでも、何人かの子どもたちはきっと先祖がわれわれにしたように、こうした貴重な文化遺産をさらなる未来に残すように努力や知恵を出してくれると思うのです。

若澤寺跡はこれからもずっと、未来の人々にその謎を解く楽しみを与えてくれるだろうし、将来の地域文化の発展に大きく寄与してくれるかもしれません。



若澤寺を探るⅤ 若澤寺跡2
～若澤寺跡調査報告書～
—平成19年 3月30日 発行—

○編集・発行

長野県波田町教育委員会
〒390-1492 長野県東筑摩郡波田町4417-1

○印刷・製本

カシヨ株式会社
長野県長野市西和田1-27-9

～文化財は昨日、今日でできるものではない。
地域の歴史が凝縮された、代わりのきかない地域の宝。
そして、ふるさとの誇り～

にやくたくじ
Nyakutakuji



長野県波田町教育委員会